

女子野球の歴史を再考する

極東・YMCA・ジェンダー

高 嶋 航

はじめに

1929年5月22日、中国の奉天（中国側の正式名称は瀋陽）で奉天高等女学校チーム（日本人）と奉天女子師範学校チーム（中国人）によるインドアベースボール試合がおこなわれた。4年生同士の試合は44対22、5年生同士の試合は22対7で、いずれも奉天高女が勝った¹。

この試合はおそらく日本人と中国人の最初の女子野球戦という点で興味深いが、研究史から見ても意義深い。というのも、従来の女子野球史研究では、日本の女子野球は大正末年でいったん消滅したとされているからである²。この定説を支持する人は、奉天での試合を、帝国日本の周縁で偶発的に起きた例外として片付けてしまうかもしれない。

大正末年に女子野球がほとんど見られなくなったのは事実だが、「消滅」したわけではない。昭和期の資料に女子野球の痕跡をたどることはそれほど難しいことではない。

¹ 『盛京時報』1929年5月24日；『満洲日報』1929年5月25日；『大連新聞』1929年6月5日。

² 女子野球（戦後は除く）の専論にはおおそ以下のものがある。桑原稲敏『女たちのプレーボール：幻の女子プロ野球青春物語』風人社、1993年；田中亮太郎「日本における女子野球に関する研究：女子野球誕生から女子プロ野球成立過程について」『芸術：大阪芸術大学紀要』18号、1995年；花谷建次、入口豊、太田順康「女子「野球」に関する史的考察（II）：日本女子野球史」『大阪教育大学紀要』第IV部門、45巻5号、1997年2月；庄司節子「ルールからみた大正期の女子野球普及についての検討」『日本体育学会大会号』1998年8月；庄司節子「近代日本における女性スポーツの創造：大正期の東海女学生キツンボール大会への視線」（東海体育学会編『創造とスポーツ科学』杏林書院、2011年所収）；竹内通夫「わが国野球史の一側面：明治・大正期の女子野球について」（篠田弘監修、井上知則、加藤詔士、高木靖文編『歴史のなかの教師・子ども』福村出版、2000年所収）；館慎吾「女子野球の歴史的考察と現状に関する課題研究」修士論文、順天堂大学、2013年。中国とフィリピンの女子野球に関する専論はない。

また、内地だけでなく、外地や極東にまで視野を広げれば、容易に女子野球の姿を見つけ出すことができる。そうであるなら、「消滅」を前提に語られてきた女子野球の歴史を、違った形で語り直すことができるのではないか。これが本稿を「女子野球の歴史を再考する」と題した所以である。

副題は、女子野球の歴史を再考するさいの三つの視点である。女子野球は日本だけでなく、時を前後して中国とフィリピンにも伝播した。言い換えれば、日本の女子野球の歴史は、極東の女子野球の歴史の一部であった。しかしながら、女子野球はそれぞれの地域で独自の展開を遂げる。本稿では、それぞれの地域におけるジェンダーのあり方、ジェンダーとスポーツ（とりわけ野球）の関係が、女子野球の歴史の差異をもたらしたのではないかと考える。

女子野球は自然に拡散伝播していったのではなく、YMCA のトランスナショナルなネットワークと、それを基礎として築き上げられた極東のスポーツ交流圏を通じて、意図的に広められた。筆者はこれまで『帝国日本とスポーツ』などの研究で、日本のスポーツを考えるうえで東アジア、あるいは極東という視点が重要であることを主張してきた³（もちろん、日本のスポーツのあらゆる側面をこのような視点から考察すべきだと主張するものではない）。女子野球は、極東の各地域の交流と多様性を浮かび上がらせる絶好の素材であろうと考えている。

女子野球と一口にいても、じつは異なるバリエーションがある。そのうち、極東の各地に広まったのはインドアベースボールであった。一方、日本では軟式野球と呼ばれる独自の野球が発達する。先行研究は、インドアベースボールと軟式野球について、ボールの種類や大きさ、ルールといった形式面の違いを指摘するだけで、その差異が持つ意味や両者の関係にあまり考慮を払ってこなかった。しかし、本稿で明らかにするように、ジェンダーという視点で見れば、両者の差異はその消滅／存続を分かつ決定的な重要性を持っていた。

以下、第一章でフィリピン、第二章で中国のインドアベースボールの普及の過程を概観する。第三章では、日本におけるゴムマリベースボール、インドアベースボール、

³ 拙著『帝国日本とスポーツ』塙書房、2012年；同「フィリピンカーニバルから極東オリンピックへ：スポーツ・民主主義・ビジネス」『京都大学文学部研究紀要』56号、2017年3月。

軟式野球の歴史を辿ったうえで、女子野球「消滅」の実態を考察し、「消滅」後の女子野球の一端をかいま見る。第四章では満洲のインドアベースボールの展開を追い、奉天高女と奉天女子師範のインドアベースボール試合の歴史的意義を論じる。おわりには、本稿の議論をジェンダーという視点から整理する。

第1章 フィリピンのインドアベースボール

インドアベースボールは1887年、イリノイ州シカゴのジョージ・W・ハンコックが考案したとされるスポーツである。通常の野球に比べて、大きめのボール、細めのバットを用い、下手投げにすることで、ボールの飛距離を抑え、室内でも競技可能にした。今日のソフトボールの源流の1つである。野球に比べて危険が少なく、簡易であることから、女性の間にも広がった。シカゴでは1900年代初頭には屋外でもプレイされるようになっていた⁴。

インドアベースボールをフィリピンにもたらしたのはYMCA体育主事エルウッド・S・ブラウンである。ブラウンはイリノイ大学でバスケットボールのコーチをした経験があり、同地で始まったインドアベースボールのことをよく知っていた。後年のインタビューで、ブラウンは1911年にマニラに赴任したさい、スーツケースのなかにバレーボールとインドアベースボール用のボールをしのばせていたと語っている⁵。これはなにもブラウンの独創ではない。アメリカプレイグラウンド協会の創設者の1人ヘンリー・S・カーティスも1912年にバレーボールとインドアベースボールが将来国民の娯楽となるだろうと語っている⁶。

体育施設が不十分なフィリピンでは、インドアベースボールはつねに野外でおこなわれ、主として女子のスポーツとして普及した。1913年にはカーニバル競技会（フィリピンの全国高校選手権大会）で女子インドアベースボールが初めて公開競技に採用

⁴ Terrence Cole, "A Purely American Game': Indoor Baseball and the Origins of Softball," *The International Journal of the History of Sport*, vol. 7, no. 2, September 1990.

⁵ "Meeting of the War Historical Bureau of the Young Men's Christian Association," January 5, 1920, in Kautz Family YMCA Archives, University of Minnesota.

⁶ Terrence Cole, "A Purely American Game'."

され、マニラからサン・ニコラス、サンタ・クルス、シンガロン、リサール州からティパス、パシグの5チームが参加した⁷。慎重深いスペイン＝カトリック的な女性とは対照的に、スポーツを楽しむ快活な女性はアメリカ＝プロテスタント的な女性のモデルであった。こうして、女性スポーツの推進は、アメリカ植民地主義を正当化する役割を果たしたのである⁸。

ミンダナオ島ミサミス州にオロキエタという町がある。同地では1913年夏にインドアベースボールが紹介されたが、最初はなかなか人々の注意を引くことができなかった。そこで教師たちは町や村のフィエスタのさいに試合をおこない、賞を出すことで人々の興味をかき立てようとした。やがてフィエスタの役員がプログラムに競技を加えることを要請してくるようになり、ついにはそれがフィエスタの主要行事となり、フィエスタの日程を試合の日程に合わせるほどになった。オロキエタの女子インドアベースボールチーム、ミサミス・オリエンタルはミサミス州代表の座を勝ち取り、1915年2月のカーニバル競技会に出場することになった。インドアベースボールは今回から公式競技となっていた。町の人々は700ペソを集めてチームをマニラに送った。少女らは地元の人々の熱意に応え、見事に優勝した⁹。

その様子を見て感激した中国人がいる。伍廷芳である。元駐米公使で弁護士の伍は国貨維持会会長として、中国製品をカーニバルの博覧会に出品するためマニラへ来ていたのだった¹⁰。伍は1915年5月に上海で開催されることになっていた極東大会の会長でもあった。伍はさっそくフィリピンアマチュア競技連盟に対して、インドアベースボールの選手を上海の極東大会に連れて来るよう要請した。伍はそれによって中国の女子体育を振興し、強健な国民を産むことのできる強健な国民の母をつくろうとした

⁷ Regino R. Ylanan and Carmen W. Ylanan, *The History and Development of Physical Education and Sports in the Philippines*, s.n., c. 1965, p. 66. カーニバルについては拙稿「フィリピンカーニバルから極東オリンピックへ：スポーツ・民主主義・ビジネス」を参照。

⁸ シュテファン・ヒューブナー著、高嶋航、富田幸祐訳『スポーツがつくったアジア：筋肉のキリスト教の世界的拡張と創造される近代アジア』一色出版、2017年。学校の軍事訓練を通して中国、フィリピン、日本の男性性、女性性を比較した拙稿「軍隊と社会のはざまで：日本・朝鮮・中国・フィリピンの学校教練」（田中雅一編『軍隊の文化人類学』風響社、2015年所収）も参照。

⁹ William H. Liesch, "Oroquieta District Athletics," *Philippine Education*, vol. 7, no. 4, October 1915.

¹⁰ 丁賢俊、喻作鳳編『伍廷芳集』下冊、中華書局、1993年、653-676頁。

のである¹¹。かくしてフィリピンの少女は極東大会に参加することになったのだが、アメリカ植民地主義下の（従属的）市民女性の代表であった彼女たちは、中国では植民地主義と戦う（主体的）国民女性の代表とみなされたのである（極東大会は日本の21か条要求受諾の直後に開かれている）。

エルウッド・ブラウンはマニラのメイジックとティパスの2チームを上海に連れて行き、極東大会期間中にインドアベースボールの試合を披露した。中国女性への影響について、『申報』は「その性質は遊戯に属するが、女性界にこれを見せれば、その尚武精神を十分刺激することができる」と記している¹²。その後、インドアベースボールチームは各地で試合をしながら北上し、北京では袁世凱の接見も受け、さらに奉天、ハルビンまで足を伸ばしたという¹³。ブラウンは何千もの中国の女学生が試合を見たと述べている。実際にフィリピンアマチュア競技連盟のハンドブックにはインドアベースボールの試合を見るために会場に入ろうとする中国人女学生の一群を撮った写真が掲載されている¹⁴。

その後もフィリピンではインドアベースボールの普及が進んだ。その模様はスポルディング社発行のインドアベースボールの公式ガイドでも取り上げられ、一例としてマニラの二つの小学校の女生徒チームが試合をしたときに2,700人の観客が集まったことが紹介されている¹⁵。1915年秋の報告書でエルウッド・ブラウンは、教育局管轄下の学校で29,000人の少女がインドアベースボールのチームに所属していると記している¹⁶。また、1916年の教育局の報告書によれば、135,000人の女生徒がインドアベースボー

¹¹ 『申報』1915年5月7日：「菲律賓之少女棒球隊」『進歩雑誌』第8巻第3号、1915年7月。

¹² 『申報』1915年5月21日。

¹³ “Meeting of the War Historical Bureau of the Young Men’s Christian Association,” in *Armed Services; World War I*. Box. 23, Kautz Family YMCA. Archives, University of Minnesota, pp. 14-17; Alfredo B. Saulo, *Let George Do It: A Biography of Jorge B. Vargas*, Quezon City: University of the Philippine Press, 1992, p. 230.

¹⁴ The Philippine Amateur Athletic Federation, *Official Rule and Handbook 1915-1916*, A. Roensch, s. n., c. 1915, p. 220.

¹⁵ A. T. Greeley, *Official Indoor Base Ball Guide Containing the Constitution, By-Laws and Playing Rules of the National Indoor Base Ball Association of the United States*, American Sports Pub. Co., 1917, p. 39.

¹⁶ E. S. Brown, “Annual Report for the Year Ending September 30, 1915,” in the Philippine Box 5, Kautz Family YMCA Archives, University of Minnesota.

ルをしていたという¹⁷。カーニバル競技会の女子インドアベースボールは、一時の断絶を挟みながらも、戦前最後となる1941年のカーニバル競技会まで続けられた。なお、この最後の大会でインドアベースボールはソフトボールに変更された¹⁸。

1921年の極東大会開催中に開かれた極東体育協会総会でフィリピン代表のカミロ・オシアスは次回大会に女子のテニスとインドアベースボールを公開競技として加えることを提案したが¹⁹、その背景にはフィリピンにおける女子インドアベースボールの発展があった。しかしながら、インドアベースボールは採用に至らず、テニス、バレーボール、水泳が公開競技として採用された。インドアベースボールが採用されなかったのは、中国と日本でまだ十分に普及していなかったからである。次に中国の状況を見てみよう。

第2章 中国のインドアベースボール

フィリピンの少女たちによるインドアベースボールを見た中国の女性は、即座にスポーツに取り組んだわけではない。中国では女子体育すら20世紀に入ってようやく始まったばかりであり、1915年時点で女子の競技スポーツは存在しなかった。翌1916年11月、揚州で開催された江蘇省立学校連合運動会で上海の愛国女学がバスケットボールを実演したのを皮切りに、女子のスポーツ競技会が広まっていく²⁰。1917年には、中国女青年会（YWCA）体育師範学校、務本女学、蘇州の蘇蘇女学などでインドアベースボールがおこなわれ、1918年4月の江蘇省立学校連合運動会で競志女学がインドアベースボールを披露した²¹。中国女青年会体育師範学校の卒業生王仏蔓は、赴任先の長沙周南女校にインドアベースボールを伝えた。1918年11月に開かれた同校の運動会

¹⁷ “Meeting of the War Historical Bureau of the Young Men’s Christian Association,” p. 14. 1年間に10倍というのは考えにくいので、どちらかの数字に誤りがあるのかもしれない。

¹⁸ Regino R. Ylanan and Carmen W. Ylanan, *The History and Development of Physical Education and Sports in the Philippines*, pp. 66-67, 237-238.

¹⁹ *The Manila Times*, October 25, 1922.

²⁰ 『申報』1916年11月5日。

²¹ 『申報』1917年11月11日、12月16日、1918年4月27日。

では塁球(インドアベースボール)が実施されている²²。1919年までに上海の愛国女学、広州の女子体育学校などでもインドアベースボールが始まった²³。

インドアベースボールは当時の中国で決して人気のあるスポーツではなかったが、各地のYMCAでは早い時期からその存在を確認できる。たとえば、1913年春に香港YMCAが建設した学生宿舎には、インドアベースボールができるスペースが確保されていた²⁴。杭州YMCAのユージーン・E・バーネットの1915年秋の報告によれば、上海YMCAのジョン・H・クロッカーと郝伯陽が杭州駐在の軍隊にインドアベースボールをはじめとする西洋スポーツを紹介した²⁵。上海YMCAでは、同年11月22日の午後にインドアベースボールが少年部の活動の一環としておこなわれているのを確認できる²⁶。中国のYMCAは1921年の1年間に46頁からなる*Official Rules for Indoor Base Ball*を500部印刷したが、1923年にはその数が2倍に増えている²⁷。同年12月に呉邦偉がこれを訳し、「戸内塁球」と題して『体育季刊』に連載した²⁸。その主たるターゲットは女性で、女学生のインドアベースボールを大いに促進したと考えられる。それが証拠に、1924年5月に武漢で開催された第3回全国運動会では、女子インドアベースボールが公開競技に採用されている。ただし、このとき参加したのは上海の滬江女子体育専科学校と両江女子体育師範学校の2校だけで、滬江が46対12のスコアで両江を破

²² 長沙『大公報』1918年11月28日。

²³ 『申報』1919年4月12、27日。

²⁴ J. L. McPherson, "Annual Report for the Year Ending September 30, 1913," (陳肅、達格瑪・蓋茨(Dagmar Getz)、大衛・克勞森(David Klaassen)整理、趙炬明審校『美国明尼蘇達大学図書館蔵基督教男青年会檔案：中国年度報告(1896-1949)：附国際幹事小伝及会所小史』全20巻、広西師範大学出版社、2012年(以下、『中国年度報告』)5巻、469頁); Frank M. Mohler, "Annual Report for the Year Ending September 30, 1913," (『中国年度報告』5巻、474頁)。

²⁵ E. E. Barnett, "Annual Report for Year Ending September 30, 1915," (『中国年度報告』8巻、8頁); Eugene E. Barnett, *My Life in China, 1910-1936*, Asian Studies Center, Michigan State University, 1990, p. 89.

²⁶ J. C. Clark, "Annual Report for the Year Ending September 30, 1916," (『中国年度報告』9巻、507頁)。

²⁷ C. W. Pettit, "Annual Statistical Report for the Year Ending December 31, 1921," (『中国年度報告』17巻、249頁); P. R. Tomlinson, "Annual Statistical Report for the Year Ending December 31, 1923," (『中国年度報告』18巻、370頁)。

²⁸ 呉邦偉「戸内塁球」『体育季刊』2巻3、4号、3巻1、3号、1923年2月-1924年9月。

り優勝している²⁹。1925年3月に広州で開かれた第9回広東全省運動会では真光、培正、培道、女子師範の4校が参加している³⁰。

華北に目を向けると、1928年に東北大学南校に壘球隊が成立、男子30人あまり、女子20人あまりが参加し、4つのチームが作られた³¹。また北京の燕京大学でも、1929年には女子棒球隊が結成されていた³²。1929年5月に奉天で開かれた第14回華北運動会では女子インドアベースボールの試合がおこなわれている³³。冒頭に掲げた奉天高女と女子師範のインドアベースボール試合は、じつはこの華北運動会の直前に開催されたものである。

1933年7月に青島で開催された第17回華北運動会では、女子インドアベースボールに山東、北平、青島、河南、河北の代表チームが参加、北平が優勝した。その3か月後に南京で開かれた第5回全国運動会で女子インドアベースボールはついに正式競技に採用される。参加は8チーム、河北、北平、河南、南京、江蘇、上海、広東とほぼ全国から代表が集まり（香港と湖南は棄権）、広東が上海との激戦を11対10で制して初の王座に輝いた³⁴。一方、男子の野球は参加6チーム（河北、北平、上海、湖南、広東、香港。湖北は棄権）でやはり広東が優勝した³⁵。全国運動会への参加チーム数が物語るように、中国では野球は男女を通じておこなわれており、日本のように男性性と強く結びつくスポーツではなかった。

第3章 日本の女子野球

第1節 ゴムマリベースボールの出現

フィリピンでは野球が伝わって10年も経たずにインドアベースボールが紹介され

²⁹ 『申報』1924年5月26日。

³⁰ 『申報』1925年3月26、30日、4月3日。

³¹ 如「女生練習棒球」『東北大学週刊』56期、1928年；楽生「南校壘球隊成立」『東北大学週刊』57期、1928年。

³² 林悦明「燕大女子棒球隊」『図画時報』571期、1929年。

³³ 魏守忠「高級女子棒球比賽」『図画時報』569期、1929年。

³⁴ 張振美、呉振芳、韓宏珠、司徒璧双『中国壘球運動史』武漢出版社、1990年、12-14頁。

³⁵ 陳湿明、梁友徳、杜克和『中国棒球運動史』武漢出版社、1990年、27頁。

た。一方、日本では1870年代に野球が伝わったあと、インドアベースボールが紹介されるまで40年以上の時差があった。この間、野球熱は女性にも広がり、女性向けの野球が各地で考案された。

日本女子大学の体操教師白井規矩郎は、当時としては目新しいハンドボールやバスケットボールなどいくつかの競技を取り入れたが、そのなかに「女子ベースボール」なるものがあった。「女子ベースボール」は、塁の配置が5角形をしていたことからわかるように、イギリスのラウンダーズをモデルとしていた。白井はラウンダーズに独自の改良を加え、女子に適した競技にしたのである。1902年春の運動会で女子ベースボールが披露されたが、その後は運動会から姿を消したという³⁶。

女子ベースボールが姿を消したとされる日本女子大学だが、1915年の新聞記事から、バスケットボール、キャプテンボールなどとともに、「ベースボールと同じ方法」で「インドアベースボール」の1種であるバットボールがおこなわれていたことが確認できる³⁷。さらにこの記事によれば、日本女子大学では木内女史が帰朝してから「新しい学校の舞踏」を始めたという。木内愛は1907年に日本女子大学英文学部を卒業し、オーバリン大学で体育専修科を修了、ハーバード大学の夏期講座体育を履修し、1912年に帰国した³⁸。とするなら、バットボールは白井の考案した女子ベースボールの発展形ではなく、木内がアメリカから直輸入した可能性が高い。いまのところ、このバットボールがどれほどの期間おこなわれたのか、学外にどれほどの影響を与えたかはわからないが、その後言及されることがないことを考慮すると、短期間で消滅し、学外への影響もほとんどなかったと推測される。

1902年7月、すなわち白井が女子ベースボールを考案したのとほぼ時を同じくして、京都市第一高等小学校でも野球を女子向けに改良する試みが始まっていた。ゴムマリをテニス用ラケットで打つという発想は、白井の女子ベースボールと共通するが、こ

³⁶ 馬場哲雄、石川悦子「日本女子大学の体育発展に貢献した人々（5）：初代体育教師、白井規矩郎について その4」『日本女子大学紀要 家政学部』37号、1996年；『読売新聞』1902年3月31日。

³⁷ 『東京朝日新聞』1915年4月18日。

³⁸ 島田法子「日本女子大学創設とアメリカ：成瀬仁蔵と教え子たちのアメリカ留学を中心に」『日本女子大学英米文学研究』45巻、2010年3月。

ちらは4角形のダイヤモンドを採用しており、野球を改良したものであることは間違いない。1年近く経って、児童たちが自発的に取り組むようになり、1911年までに校技と見做されるほど盛んになっていた³⁹。

そもそも京都では、明治末から大正初めにかけて、男子小学生が野球遊びに熱中し、軟式テニス用の赤Mボールやスポンジボールを使って、小学校対抗大会が開かれていた。赤Mボールは投げづらく、スポンジボールはすぐに割れてしまうなど、ボールをめぐるトラブルが絶えなかったことから、京都市第一高等小学校教諭の糸井浅次郎を中心に、京都市の小学校教諭や文具商の鈴鹿栄らが京都市少年野球研究会を立ち上げ、ゴムマリ野球のルール of 制定に取り組むことになった。1916年のことである。1年余りの研究のすえ、同研究会は1917年（序文は同年12月15日）にゴムマリ野球のルールブック『児童適用ゴムマリベースボール』を刊行する。その後、同研究会はボールの研究製作に取り掛かった。その中心人物は有田辰三、鈴鹿栄、水原昭だった。有田らは試行錯誤の末、ボールの直径、硬さ、表面のすべり止めの形態を決定し、神戸の東神ゴム工業株式会社に製作を依頼、1918年夏に試作ボールを完成させた。1919年7月、京都少年野球研究会は新しくできた少年野球ボールを用いて初めての野球大会を開いた⁴⁰。

日本の女子野球は、各地で試行錯誤が続けられた後、京都で生まれたゴムマリベースボール、軟式野球（当初は軟球野球などと呼ばれた）、そしてアメリカからもたらされたインドアベースボール（とキッツンボール）の3つの形式が互いに影響を及ぼしつつ展開していくことになる。

1916年春、名古屋女学校の越原和校長がテニスボールを使って生徒に野球を教えたところ、生徒は「非常に興味を以て練習」した⁴¹。この名古屋女学校の野球は京都のゴムマリベースボールとは無関係に誕生した。ゴムマリベースボールの存在が名古屋で知られるようになるのは、『児童適用ゴムマリベースボール』の刊行後である。

去年〔1917年〕の夏頃であつた。旧三高の野球主将現京大の折田氏が京都市第一

³⁹ 京都市第一高等小学校編『女子適用ベースボール』編者刊、1903年；「京都市第一高等小学校編『京都市第一高等小学校教育概況』編者刊、1911年、16頁。

⁴⁰ 『軟式野球史』13-17頁。口絵に『児童適用ゴムマリベースボール』の写真がある。

⁴¹ 竹内生「女子に奨励すべき体育運動と団体競技（下）」『スポーツマン』2巻11号、1923年11月。

高等小学校教員の依頼を受け小学校の生徒に適応した野球技を考案し、爾来京都各小学校の先生や多くの専門家に依つて、遂にゴム毬ベースボールと云ふ一つの野球規則が完成した。之が不思議にも小学校男女生徒の趣好に投じ、盛に行はるゝ様になり、庭球より今では此方が興味ある遊戯として、小学校及女学校の生徒間に流行してゐる。それで大阪毎日京都支局では去年十二月下旬京都各小学校野球大会を開いたが、其結果は同地師範附属小学校の優勝に帰し⁴²、間もなく大阪朝日京都支局は少年野球模範試合を開いた。之に参加した男生徒も女生徒も一生懸命に試合をしたり応援したりする処少くも普通の野球と異ならぬ。此少年野球は野球の様に熱狂的のフアイン、プレーはないが、危険もなければ広大なグラウンドも要せず、名古屋市内の小学校グラウンドで充分に演ぜられ、道具も僅一個の赤M印のゴム毬一個と、一本五十銭位のバット一本又はラケット一本あれば足るので費用も極めて僅少である⁴³。

ここに登場する折田とは、折田有信のことである。全国中等学校優勝野球大会の創案者の1人で、その第1回大会で審判を務めたという経歴から考えれば、折田が少年野球に関わったとしても決して不思議ではない。これまで軟式野球史で触れられることのなかった折田の存在も興味深いが、ここではこのゴムマリベースボールが女生徒の間にも広がっていたということが重要である。

ゴムマリベースボールの影響についてもう1例挙げておきたい。今治高等女学校では1917年11月上旬に中村敏男教諭が野球の指導を始めた。やがて全校生徒の間に野球熱が広がり、12月23日には第1回の校内野球大会が開かれた。野球といっても、テニス用ゴムボールをワンバウンドさせてラケットで打つというものであった。翌年には京都のゴムマリベースボールが伝わり、徐々に改良が加えられ、テニス用ボールは少年野球用ボールに、ラケットはバットに変わっていった⁴⁴。

⁴² 1917年12月15、16、23日に開催され、参加23校、出場選手200余名に及んだ（『大阪毎日新聞』1917年12月16日）。

⁴³ 『新愛知』1918年1月11日。

⁴⁴ 愛媛県立今治北高等学校沿革史編纂委員会編『愛媛県立今治北高等学校沿革史：創立七十五周年記念』愛媛県立今治北高等学校、1973年、251頁；愛媛県立今治北高等学校編『北桜：創立80周年記念誌』愛媛県立今治北高等学校創立80周年記念事業期成会、1979年、16頁；愛媛県立今治北高等学校創立百周年記念通史編集委員会編『愛媛県立今治北高等学校創立百周年記念』

今治高等女学校では生徒にベースボールを課して居るが之は「ゴムマリベースボール」と称して昨年京都の小学校から興つたもので現今京阪地方では小学校、女学校で盛に流行して居る、大体の方法は普通のベースボールと何等の変わりもないが、ゴムマリを用ゐて子供や女学生にやらせる様に出来て居るだけに多少異つた所がないでもない⁴⁵。

今治北高等学校の創立 80 周年記念誌には、袴姿でヘッドスライディングする女学生の写真が掲載されている⁴⁶。写真そのものは「やらせ」かもしれないが、なかなか本格的にやっていたようである。今治高女の野球は『東京朝日新聞』でも報じられて、全国的に知れ渡った⁴⁷。校友会誌『学友』第 16 号（1918 年 12 月）はその反響を次のように記す。

名古屋の愛知新聞のごときは遙に書を寄せて其の危険を如何なる方法にて予防しつつあるか、また女子には過激に非ざるか等と警告し、一方には早稲田大学野球部選手が、アメリカより取寄せたる『インドワーベースボール』なる物を紹介して来た。殊にジャパントイムスには『日本に於ける最初の女学生の野球チーム』として外人にまで発表せられた⁴⁸。

今治高女から刺激を受けて、済美高女や大洲高女にも野球が導入されたというし、1920 年春には今治実科高等女学校と野球の試合もおこなわれた。このときの写真を見ると、グローブをはめ、小さなボールを使っているのも、軟式野球に転じたいらしい。この春には中村敏男教諭が和歌山の粉河中学に転勤している。『北桜 80 周年』はこれを「野球に熱をあげすぎて左遷させられたとか」と記していることから、野球に対する批判も少なからずあったのだろう⁴⁹。1920 年 12 月に校内で開かれた野球大会が今治

通史』愛媛県立今治北高等学校、1999 年、77 頁。バットを使っていることから、少女野球ではなく少年野球を採用したことがわかる。両者の区別については後述する。

⁴⁵ 『愛媛新報』1918 年 6 月 15 日。

⁴⁶ 愛媛県立今治北高等学校編『北桜：創立 80 周年記念誌』16 頁。

⁴⁷ 『東京朝日新聞』1918 年 5 月 25 日。

⁴⁸ 愛媛県立今治北高等学校沿革史編纂委員会編『愛媛県立今治北高等学校沿革史』250-251 頁。この文章では、愛知新聞（『新愛知』）が「警告」したかのように読めるが、後述するように『新愛知』は女子野球推進に熱心だったので、何かの間違いであろう。

⁴⁹ 愛媛県立大洲高等学校創立百周年記念誌編集委員会編『大洲高等学校百年』愛媛県立大洲高等学校創立百周年記念事業期成会、2001 年、248 頁。

高女の野球に関する最後の記録となった。ただし、大洲高女ではもう少し続いたようで、天野糸枝（1927 年春卒業）は手記に、「私はまるで水を得た魚のように運動に熱中した。グローブと言う大きな手袋をはめてキャッチボールに興じたり、テニスの選手にもなった」と記している⁵⁰。

第2節 YMCA とインドアベースボール

次にインドアベースボールの広がりを見てみよう。日本におけるインドアベースボール普及の起点となったのは YMCA である。なかでも最も早くにインドアベースボールを導入したのは大連 YMCA だった。大連 YMCA 会館は 1911 年 3 月に完成、アメリカ人名誉主事カーライル・V・ヒバードが会館内での体育事業の一環としてインドアベースボールを紹介した。1912 年 10 月に寄宿舎の 2 階と 3 階の試合が開かれたが、これが管見の限り日本で最も早いインドアベースボールの記録である⁵¹。1917 年 11 月には大連 YMCA に室内野球部が組織され、4 チームが参加して選手権大会が開かれた⁵²。

内地で最も早いのは神戸 YMCA だろう。神戸 YMCA 開館が完成したのは 1913 年 1 月だが、前年の 11 月には屋内スポーツ施設が使用可能となっていた。神戸 YMCA には体育部が設立され、宮田守衛らの指導により新会館でバスケットボール、バレーボール、インドアベースボールなどがおこなわれたという⁵³。宮田は 1911 年 12 月に YMCA 国際訓練学校を卒業後、ただちに神戸 YMCA に赴任しており、アメリカからインドアベースボールを直接持ち込んだのかもしれない。

1913 年秋、長崎で YMCA 名誉主事のジョージ・E・トルーマンが「室内ベースボール」を紹介、その後しだいに愛好者が増えた。1915 年夏には水曜日夜がインドアベースボー

⁵⁰ 愛媛県立大洲高等学校創立百周年記念誌編集委員会編『大洲高等学校百年』248 頁。

⁵¹ 『満洲日日新聞』1912 年 10 月 13 日。

⁵² 『満洲日日新聞』1917 年 11 月 17 日。

⁵³ 服部宏治『日本の都市 YMCA におけるスポーツの普及と展開：大正期から昭和期（戦前）を中心とした YMCA の「体育事業」』溪水社、2015 年、125 頁。服部は、神戸 YMCA にインドアベースボールが紹介された正確な時期に言及しない。大正 3 年の体育館案内には室内野球が見えるので、それ以前ということになろう（神戸キリスト教青年会編『限りなき前進を：健康・教育・余暇』神戸 YMCA80 周年記念出版事務局、1979 年、484 頁）。

ルの時間となり、10月には第一回室内ベースボール大会が開催されている⁵⁴。

1913年10月、北米YMCAから体育主事フランクリン・H・ブラウンが日本に派遣される。東京YMCAにインドアベースボールを紹介したのはブラウンであろう⁵⁵。1915年2月に関西に拠点を移したブラウンは、神戸YMCA、大阪YMCA、京都YMCAでインドアベースボールを指導する。1915年6月に神戸YMCAと京都YMCAの対抗競技がおこなわれたさいには、インドアベースボールが競技種目の1つとして採用された⁵⁶。京都YMCAでは、とりわけ1917年11月に組織された少年部でインドアベースボールが人気となった。「インドアベースボールもよく好んでやったものだが、ボールは直径十センチメートルぐらいで、中に綿や切りくずを入れてあり、打ってもすぐに床に落ちてドドドと音をたててころげていた。だから外野がなくてもできるゲームでした」とは、少年部の一員だった有本嘉郎の証言である⁵⁷。これは、ちょうど京都市少年野球研究会が『児童適用ゴムマリベースボール』を刊行した時期にあたる。

1919年に伊東卓夫が東京YMCA体育部で使われていた教材を『正式インドアベースボール規定』として自社（美満津商店）から刊行した。東京YMCAでは、全国から集まった講習生に室内野球を教えており、そのテキストとして使用されたと思われる⁵⁸。1922年には大阪YMCAの増田健三も、美津濃運動用品店から『室内野球規定』を刊行している⁵⁹。

⁵⁴ 松本汎人『袋町「青年会館」の盛衰：長崎YMCAの歩み：1902～1945年』大都印刷、1999年、188頁。長崎YMCAの体育事業については、服部宏治「明治期から大正期の長崎YMCAにおける「体育事業」の普及と展開」楠戸一彦先生退職記念論集刊行会編『体育・スポーツ史の世界：大地と人と歴史との対話：楠戸一彦先生退職記念論集』溪水社、2012年も参照。

⁵⁵ 1915年秋の報告書でブラウンは東京YMCAのコンクリートの空き地でインドアベースボールがおこなわれていたことを記している（Franklin H. Brown, “Annual Report for the Year Ending September 30, 1915,” in International Work in Japan. Box 4, Kautz Family YMCA Archives, University of Minnesota）。この空き地は前年度の報告書で「archery range（弓術練習場）」と言及されていたものだろう（Franklin H. Brown, “Annual Report for the Year Ending September 30, 1914.”）。

⁵⁶ 服部宏治『日本の都市YMCAにおけるスポーツの普及と展開』219頁。

⁵⁷ 京都YMCA史編さん委員会編『京都YMCA史』京都キリスト教青年会、2005年、134-135頁。

⁵⁸ 「運動界時報」『野球界』12巻2号、1922年2月1日。

⁵⁹ 伊東の『正式インドアベースボール規定』と増田の『室内野球規定』は字句に若干の違いはあるものの、基本的な構造は同じである。

このように、フィリピンや中国と同じく、日本でも YMCA がインドアベースボールの普及に大きな役割を果たしていたが、その主たる対象は男子会員だった。しかし、女学生への普及にも YMCA は間接的に関わった。

欧米は勿論東洋でも非律賓の児童及婦人の間にインドアベースボールが流行して上海の東洋オーリンピック大会には非律賓諸婦人少女が華々しく戦つたと云ふれである。日本では未だ之が試み^マのなかつたが、山松〔鶴吉〕愛知県立第二女師校長が同校で此新遊戯を当学期の始めから試みる事になつた。そして此遊戯を普及する準備として京都大阪で熾んに行はれて居るゴム毬のベースボールを紹介したい⁶⁰。

1918 年 1 月、新愛知新聞社の林正雄はこのように述べて、京都のゴムマリベースボールとインドアベースボールを紹介した。林によれば、ゴムマリベースボールには少年用と少女用があり、少年野球はバット、少女野球はラケットを用いるのが特徴であった⁶¹。

庄司節子によれば、林正雄は名古屋 YMCA のメンバーであり、1917 年に京都 YMCA でインドアベースボールの講習を受けたという⁶²。この講習会とは、1917 年 8 月に京都 YMCA が開催した洋式運動講習会のことだろう。同講習会ではバスケットボール、バレーボール、インドアベースボールが教えられた⁶³。林がインドアベースボールとともに、ゴムマリベースボールを紹介したことは、京都 YMCA と京都市少年野球研究会の間に、なんらかの関係があったことを示唆する。

林が訳出した「軟球野球（インドアベースボール）」と、伊東や増田の規定を比べると、いくつかの違いがあることに気づく⁶⁴。インドアベースボールには室内用の規定と室外用の規定があり、たとえば前者は塁間 27 フィート、後者は 35 フィートである。ダイヤモンドの大きさに応じてボールの大きさにも違いがある。YMCA の場合、室内

⁶⁰ 『新愛知』1918 年 1 月 11 日。

⁶¹ 前掲『児童適用ゴムマリベースボール』は未見だが、『軟式野球史』に掲載された写真には、「男児の部」なる記述が見えるので、「女児の部」が存在したはずである。

⁶² 庄司節子「近代日本における女性スポーツの創造」。

⁶³ 服部宏治『日本の都市 YMCA におけるスポーツの普及と展開』130 頁。

⁶⁴ 『新愛知』1918 年 1 月 17-19 日。

でおこなわれることが多かったから、伊東も増田も室内用の規定に依ったが、林は室外用にアレンジしたのだろう。プレーヤーの数は伊東も増田も7人もしくは9人とするが、林は11人とする。11人というのは他の規定には見えず、当時の京都YMCAがそのような規定を採用していたのかもしれない。

林とともに女子野球普及に努めた新愛知新聞社の広瀬謙三によれば、林は高等女学校にインドアベースボールを、尋常小学校の女生徒にゴムマリベースボール（少女野球）を練習させた⁶⁵。このことは、林がインドアベースボールをより優れたものと考えていたことを意味する。林は「京都や奈良で盛に流行してゐる帝大折田君案のゴムマリ野球の如きはどうも地方的の遊戯であつて世界的の遊戯でなく又興味も到底インドア、ベースボールに比すべくもない」と述べ、国際性と興味の点からインドアベースボールの価値を評価していた⁶⁶。

1917年12月末、台湾、フィリピン遠征に出かけた早大野球部は、マニラで女学生によるインドアベースボールの試合を目にした。

決勝戦の終つた日ナザレタグラウンドで比律賓各高等女学生対校のインドアベースボール試合を見物したが、其巧な方には一驚を喫した最も感心したのは其の走塁法で、実に獐猛な滑込みをするには優勝選手一同大分アテられて仕舞つた、女子の野外運動としてはテニスもよからう、バスケットボールもよからうが、更らにこのインドアベースボールを採用したならば一層満足することが出来ようと思はれる⁶⁷。

早大野球部員が今治高女にインドアベースボールを紹介したことは先述した（採用はされなかった）が、じつは愛知県ママの女学校にもインドアベースボールを紹介している。

近頃比律賓では、男子のベースボールに対向して、女子にインドアママベースボールの競技が大層流行するさうで、先年早稲田の野球団員が之を愛知県立女子師範へ伝へたのが、日本での最初の試みでしたが、昨今では大した勢力で同校に流行し余程熟練したさうです⁶⁸。

⁶⁵ 広瀬謙三「若き婦人に適する運動競技」『運動界』3巻6号、1922年6月。

⁶⁶ 『新愛知』1918年2月11日。

⁶⁷ 「早大マニラ土産（十）」『読売新聞』1918年3月9日。

⁶⁸ 『読売新聞』1918年10月6日。

愛知の女学校にインドアベースを紹介した早大野球部員はおそらく花井昌三であろう。花井は愛知一中出身で、早大野球部マネージャーをしており、台湾、フィリピン遠征からの途次に実家に寄っている⁶⁹。林は女子のインドアベースボールを実際に目にしたことがなかったであろうから、花井の経験は貴重なものだったにちがいない⁷⁰。ちなみに、愛知県立女子師範も愛知県立第二女子師範も校長は山松鶴吉であった。

1918年6月、新愛知新聞社運動部主催で第1回「インドア・ベースボール大会」が開催された⁷¹。大会では、男子小学生のインドアベースボール優勝試合に加えて、女子小学生（菅原小学校、千種小学校）の少女野球試合と女学校のインドアベースボール試合（淑徳高等女学校紅白戦、県立女子師範学校紅白戦）がおこなわれた。同年10月末から11月中旬にかけて第2回大会が開催、女学校は淑徳高女、名古屋女学校が参加した（名古屋市立第一高女、金城女学校、県立第二高女はスペイン風邪流行の影響で参加できなかった）。女子小学生は菅原小学校、千種小学校、岐阜小学校が参加して「京都流のラケットボール」の試合がおこなわれた⁷²。20対4で名古屋女学校に大勝した淑徳高女は、各学年にチームがあつて盛んに対抗試合をしていたが、インドアベースボールの流行は1919年春までで、その後は「色色事情」があつて学校から姿を消したとされる⁷³。

1919年3月、『野球界』主幹の横井春野（横井鶴城）は関西に行った帰りに、名古屋女学校の越原和を訪ねた。2人は早大在学時からの親友であった。女生徒と職員が入り交じり、愉快地野球をする様子を見た横井は、6月刊行の『野球界』に越原和「女子に野球を奨励す」と広瀬謙三「女学生野球大会」の2篇の文章、そして名古屋女学校野球部選手の写真を掲載した。この記事で越原はまず、男子の体育だけが発達して

⁶⁹ 『新愛知』1918年2月26日。花井の遠征談は『新愛知』（1918年2月26-28日）に掲載されたが、決勝戦のところで記述が終わり、その後に見学したインドアベースボールへの言及はない。

⁷⁰ 花井はこの年の夏に病気にかかり、療養先の名古屋で亡くなった（飛田穂洲『早稲田大学野球部史』明善社、1925年、244-245頁）。

⁷¹ 庄司節子「東海女子学生キッツンボール大会と女子野球の普及活動」。

⁷² 『新愛知』1918年6月11日；広瀬謙三「女学生野球大会」『野球界』9巻8号、1919年6月；庄司「近代日本における女性スポーツの創造」。

⁷³ 学園史編纂委員会編『愛知淑徳学園史』愛知淑徳学園、1965年、115-119、131頁。

女子の体育が発達しなければ、健全な子孫をつくることができず、国際的生存競争に打ち勝つことのできる国民を作り出せないとして、女子体育の必要性を論じた。ついで、現在の学校体操は不十分で、野球やテニスのような戸外運動がよいと述べる。さらに、元気のいい女性と「お転婆」は違うと指摘して、女子野球に対する批判を封じ、「元気あつて且つシトヤカナ女子」は勇壮活発な運動によってこそつくりだされると説いた。越原は服装にも注意を払い、独自の運動服を案出している⁷⁴。男子との差異化に気を遣わねばならなかったのは、野球のみならずスポーツそのものが男性のものと考えられていたからである。

1921年6月、横井は『野球界』誌上で女子野球団の結成を呼びかけるが、応募者は1、2名しかおらず、断念せざるをえなかった⁷⁵。この反応の少なさには、女性の読者がほとんど居なかったであろう『野球界』そのものの問題が大きく関係していよう。ただし、男性の野球関係者が女性に野球を教える契機にはなったかもしれない。

事実、1921年から翌年にかけて、インドアベースボールは急速に広がっていった。新愛知新聞社から国民新聞社に移った広瀬謙三は、1922年5月の『運動界』で、大連、旅順、静岡、横浜等の女学校で「インドアベースボール」がおこなわれていることを紹介している⁷⁶。とりわけ関西の女学校でのインドアベースボール普及は目覚ましく、奈良女子高等師範学校、大阪梅田高女、市岡高女でインドアベースボールが採用されていたほか、大阪の清水谷、夕陽丘、女子師範、樟蔭の各校でも導入される予定であった⁷⁷。

インドアベースボールの急速な普及の一方で、キツンボールや軟式野球への転換が生じていた。軟式野球については次節で論じることとして、ここではキツンボールへの転換を見ておきたい。

⁷⁴ 越原和「女子に野球を奨励す」『野球界』9巻8号、1919年6月；広瀬謙三「女学生野球大会」。

⁷⁵ 横井冬海「女子野球団希望者を募る」『野球界』11巻8号、1921年6月；鈴木江北「女子野球夜話」『野球界』12巻11号、1922年8月1日；横井鶴城「女子野球回顧」『野球界』16巻5号、1926年5月；横井春野「女子野球の時代来る」『野球界』21巻1号、1931年1月。

⁷⁶ 広瀬謙三「女子運動の考察：現在の女子運動分域」『運動界』3巻5号、1922年5月。

⁷⁷ 『野球界』12巻9号、1922年7月1日；『スポーツマン』1巻4号、1922年8月；寺田瑛『女子の運動競技』日本評論社、1923年、109-111頁；刃刀俊雄「川口英明の球技教材研究：ベースボール型球技の教材づくり」『学習研究』471号、2014年10月。

そもそもインドアベースボールは、少女野球よりも困難で興味が深く、女性に適したスポーツとして導入された。インドアベースボールはその名の通り、室内でプレイできるように、道具やルールにさまざまな制限が課され、簡便で危険が少ないことが利点であった。新愛知新聞社の林正雄が「インドア・ベースを女子にコーチするに当り決してボーキング、トリッピング及びスライディングなどを教へてはならぬ、是等は女子の優雅な徳性を害ふものである、若しこれ等をしなければ興味が殺がれる様なベースボールは女子に指導する事は見合せたがよい、インドア・ベースは決して右の三種を絶対に禁ずる事によつて毫も興味が殺がれる競技ではない」というアメリカのインドアベースボール指導者の言葉を強く意識していたように⁷⁸、批判の多い女子野球を提唱するにあたって、女性らしさとの兼ね合いは重要であった。それゆえ、インドアベースボールのルール自体は滑り込みを禁止していなかったにもかかわらず、女子には滑り込みをさせないという措置が取られたのである。フィリピン少女の滑り込みに早大生が感心したことは先述したが、教育当局が率先してインドアベースボールを奨励していたフィリピンと違って、日本では女性らしさへの配慮は、競技の存続を左右しかねない問題であった。しかしながら、これらの制限のために興味が殺がれたのも事実である。指導者の側でも、女学生の側でも、より困難で、より興味の多い野球への欲求が生まれてくるのは避けがたかった。

1921 年ころ、インドアベースボールを改訳するにあたり、林正雄はキッツンボールなるものの存在を知った。林の紹介によれば、キッツンボールとは 1916、17 年にミネアポリス中央体育院監督 H・A・ジョンソンが創案した野球のバリエーションである。林はスポルディング社のインドアベースボール公式ガイド *Official Indoor Base Ball Guide Containing the Constitution* を見たに違いない⁷⁹。1921 年に刊行された同ガイドの 1921-1922 年版にはキッツンボールのルールが新たに加えられている。林はキッツ

⁷⁸ 林正雄「婦人のスポーツとしてのキッツンボール」『アサヒスポーツ』1 巻 14 号、1923 年 10 月 1 日。

⁷⁹ *Official Indoor Base Ball Guide Containing the Constitution, and By-Laws of the National Indoor Base Ball Association of the United States*, American Sports Pub. Co., 1921. 起源についての説明は同書 35 頁にある。世界野球ソフトボール連盟(WBSC)のホームページによれば、キッツンボールは 1895 年にミネアポリスの消防士ルイス・ロウバーが考案したとする (<http://www.wbbsc.org/softball/history-of-softball/>)。

ンボールを実際にやってみて面白いと感じ、「籠球」と訳してその普及に取り組むことになった。その結果、1922年に名古屋籠球クラブ、名古屋YMCA 籠球クラブが結成された⁸⁰。名古屋市立第一高女では1922年の新学期が始まってまもなく、坂本孝吉教諭が「YMCAの体育指導の先生や村瀬運動具店主らとアメリカの運動雑誌に紹介された新しい球技キツンボールを研究し」、一年生に指導した⁸¹。当時、名古屋YMCAには、大阪YMCAから赴任した増田健三、長崎YMCAから赴任したトルーマンら、インドアベースボールの指導経験がある人物がいた。別の記事によれば、名古屋の女学校でキツンボールが練習されるようになったのは1922年9月以降であった⁸²。

インドアベースボールからキツンボールに移行した理由を、名古屋女学校の越原校長はこう語る。

インドア・ベースボールの方も全く日本にて戸内遊戯としては行ひ得べくも候はず、それにインドアの球は十二乃至十四時の囲りに候間日本の女子には手に余る事に存じ候、かれこれ考慮の結果「キツンボール」なれば兎に角世界の一角にても盛に行はれ、インドアよりは球も飛び従つて範囲も広くなり興味も有之候故キツンボールを採用仕り候⁸³。

キツンボールの重量は6オンス、周囲は12寸、塁間は45フィートだったから、インドアベースボール（それぞれ約8オンス、約14寸、約35フィート）に比べて、球がよく飛んだことは間違いない。規則では禁じていないスライディングを禁じたことは、インドアベースボールの場合と同じく、困難さと女性らしさの妥協だったのだろう。

早くも1922年10月23日には、日本臣道会主催、新愛知新聞社後援で最初のキツンボール大会が開催され、愛知県立女子師範学校、名古屋高等女学校（名古屋女学校より昇格）、名古屋市立第一女学校が参加した。翌年6月には名古屋キツンボール倶楽部主催、大阪朝日新聞社名古屋通信部後援の第1回東海女学生キツンボール大会

⁸⁰ 林正雄「新しい中京名物 キツンボールの盛況 女生に相応しい壮快な競技」『アサヒスポーツ』4巻6号、1926年3月15日。

⁸¹ 市一・菊里創立百周年記念誌編集委員会編『創立百周年記念誌』名古屋市立菊里高等学校、1996年、37頁。

⁸² 林正雄「婦人のスポーツとしてのキツンボール」。

⁸³ 竹内生「女子に奨励すべき体育運動と団体競技（下）」『スポーツマン』2巻11号、1923年11月。

が開催、1925年11月まで6回の大会が開かれた。1924年4月に開催された第3回大会では、参加校が5校に達し、グラウンドは女学生で埋めつくされたという⁸⁴。

キツンボール熱の高まりを前に、いち早くインドアベースボールを採用しながら、まもなく止めてしまった淑徳高女の小林清作校長は1925年1月に刊行された記事でこう述べた。

近頃女子の体育について世間が漸く目覚めて来たのは結構です此機に際して野球は女子に不適當だの、跳躍は過激だの、対校競技は悪いだの、選手制度は弊害があるのと、いろいろと云ふものがあるが、折角黎明期に入つた女子の運動の出鼻を折らうとするのは心ないことだと思ひます、それも科学的に然りといふ根拠があるならばまだしもですが、只一寸した感じや気分からの議論であるから到底話になりません。私としては野球でもなんでもやつてみたいと思つてゐる、女子に不適當なものは自然に淘汰されます⁸⁵。

しかしながら、淑徳高女がキツンボール大会に参加することはなかった。そして、キツンボール大会そのものも1925年11月の第6回大会が最後となった。なお、この最後の大会では女子と別の会場で男子のキツンボール大会が開かれ、名古屋中学、名古屋税務署、名古屋キツンボール倶楽部、名古屋YMCAが参加している⁸⁶。

インドアベースボールにせよ、キツンボールにせよ、決して女子専用の競技ではない。その普及に尽力したYMCAが男性のための組織だったことを考えると、それは当然である。しかしながら、インドアベースとキツンボールがまだ数少なかった女子の競技の1つとして注目を集めたのに対して、男子のそれは、名古屋を例外としてほとんどYMCAの範囲を超えることがなかった。結果的に、インドアベースボールとキツンボールは、女子に適したスポーツとして認知されていった。男性指導者もそれが男性的な野球とは異なって、女子にふさわしいスポーツであることをアピールしていったのである。

⁸⁴ 詳しくは庄司節子「近代日本における女性スポーツの創造」。

⁸⁵ Y・S生「女子運動王国を建設した愛知淑徳高女、その体育方針と効果」『アサヒスポーツ』3巻1号、1925年1月1日。

⁸⁶ 庄司節子「近代日本における女性スポーツの創造」。

第3節 軟式野球の拡がり

1919年3月、文部省は全国各府県の女子師範学校、高等女学校、女子実業学校に対して、体育状況の調査を実施した。「正規の体操時間外又は休暇中に行ふ諸運動」「最も奨励せる運動」の項目に対する回答から、この時点での野球の広がりを確認できる。「ベースボール」と回答したのは、京都府立女子師範学校、兵庫県立亀山女学校、「女子野球」は今治高等女学校、「野球」は山口県船木女子技芸学校であった。京都府立女子師範学校は「最近ベースボール（軟球）を試み居れども其適不適を適確に断定する能はず」と回答している。京都で考案されたばかりの軟式野球を1919年春に早速取り入れたのだろう。一方、インドアベースボールを実施していたのは、愛知県立女子師範学校、愛知県立第一高女、愛知県立第二高女、西尾町立高女、愛知淑徳高女といずれも愛知県の学校であった⁸⁷。

1922年8月の『野球界』で、鈴木江北が「女子野球団の先駆をなしたのは、西に名古屋、東で、宇都宮であらう」と記すように、東日本で最初に女子野球に取り組んだのは宇都宮高女だった。同校の図画教諭小堀章（東京美術学校卒）は、「万難を排して」女子野球チームを組織した。その時期は、文部省の調査後まもなくだっただろう。1920年に宇都宮高女の野球は黄金時代を迎える。1921年春になると栃木高女にも野球が紹介され、野球熱が全校生徒の間に広まった。しかし、これに対して批判攻撃の聲がまきおこり、栃木高女の野球は禁止に追い込まれた。この影響で、宇都宮高女でも野球は下火になった⁸⁸。

1921年春、宮城県立第二高等女学校で野球が始まった。校長の小倉博は「お転婆養成主義」を掲げ、健康を良妻賢母の基礎と位置づけ、体育を奨励していた。野球を始めてまもなく『読売新聞』に取り上げられて「ワイ／＼騒がれ」たために、流石の小倉校長も「大いに面喰」って、一時期「鳴りを静めて居た」が、年末には高等科でチームを編成するに至った。もともと「硬い球でやらせる計画」だったが、練習中に選手が負傷したことからスポンジボールを用い、ミットとグローブを使っていた。県立第二高女の野球部設置を機に、仙台の女学生間に野球熱が高まり、1922年春には県立第

⁸⁷ 文部省編『女子体育状況調査』文部省、1920年。

⁸⁸ 鈴木江北「女子野球夜話」。

一高女でも野球部ができることになり、向網女学校でも野球場の建設が計画されていた⁸⁹。おりしも東京では文部省主催の運動体育展覧会が開催されており、『野球界』主幹の横井春野や元早大野球部の石井順一らは宮城県立第二高女と水戸高女の野球戦を実施すべく奔走し、文部省から許可を得たものの、両校とも文部省をはばかって、当校では野球をやっていないと断ったため、実現しなかった⁹⁰。女子野球の多くは関係者によるこのような自己規制によって消滅していくことになる。

1922年4月の『サンデー毎日』によれば、この時点で四国、京都、名古屋、岡崎、宇都宮、長野、仙台等の高等女学校に野球チームがあったという⁹¹。翌月に全国女子師範学校長会議が開かれたさい、8校で野球がおこなわれていることが報告された。なかでも富山、石川では猛烈に流行しており、「大抵インドア式か軟球」であった⁹²。1922年には女子野球は全国的に広がり、11月には『東京朝日新聞』の社説で「男子のみの専有とせられた野球が最近各女学校に盛んになり」と言及されるまでになった⁹³。このような女子野球の急速な拡大の過程で、より困難な野球を求める動きと、女子野球に反対する動きが明確になっていった。この2つの動きは密接に絡み合いながら、女子野球の運命を決定づけることになる。

直方高女の白石強太郎教諭がクラスの生徒にキャッチボールをさせたのは1922年春のことだった。隣接する直方北尋常小学校の生徒が最初はその様子を傍観し、ついで

⁸⁹ 『読売新聞』1921年5月22日、1922年5月8日；「仙台第二高等女学校野球団成る」『野球界』12巻1号、1922年1月1日；「野球は女性の新競技」『サンデー毎日』1巻5号、1922年4月30日。渡辺信夫監修『目で見る仙台の100年』郷土出版社、2001年、62頁には宮城県立第二高等女学校野球部選手の写真が掲載されている。

⁹⁰ 鈴木江北「女子野球夜話」；横井鶴城「女子野球回顧」『野球界』16巻5号、1926年5月；『東京朝日新聞』1922年4月6日。名古屋女学校にも打診したが、校舎の改築で練習不足と断られたという。

⁹¹ 「野球は女性の新競技」。全日本軟式野球連盟編『軟式野球史』ベースボール・マガジン社、1976年、102頁には諏訪市の高等女学校で野球がおこなわれていたとする。長野県諏訪二葉高等学校七十年誌刊行委員会編『長野県諏訪二葉高等学校七十年誌』長野県諏訪二葉高等学校同窓会、1977年によると、諏訪高女で競技が体操科の授業に取り入れられたのは1926年、運動部が設けられたのは同年秋で、庭球だけはそれ以前からあったようだが（同書236-237頁）、野球に関する記述はない。

⁹² 『東京朝日新聞』5月19日；『大阪毎日新聞』5月19日。

⁹³ 「我国女子の体育改造 運動体育の必要」『東京朝日新聞』1922年11月14日。

女学生と打ち混じり、とうとう試合をするに至った。浅川雄太郎校長らが応援する前で女学校チームは大敗、女生徒の挙動、姿勢の緩慢、動作の遅鈍に呆れた教師陣は野球部新設を決定、白石教諭が部長に就任した。73名の希望者から徐々に選手を選抜し、夏休みには3週間、午前8時から午後3時まで練習に励んだ。白石の指導は周到かつ厳しいもので、楽市小学校との試合では、観戦に来ていた中島鉱業の経理部長がその「獐猛な罵声」に驚き、同社野球部主将の井土敏慧に「今少し女の事ではあるし、クロスゲームでもあるから物柔かに叱るやうにと注意を与えてくれよ」と忠告したほどだった。少年チームと対戦したことといい、女性らしさにこだわったインドアベースボール関係者の指導とは対照的である。メキメキと実力をつけた直方高女は11月に少年野球大会に出場し優勝を果たす。翌月には熊本県立第一高女との試合が予定されていた。まさにこのとき、沢田牛麿知事が突如野球部解散の命を下した。沢田は女学生の洋服すら廃止しようとしているとの噂が立つほどの「国粹保存者」であった⁹⁴。沢田の癪に触れたのは、県外チームとの対戦ではなく、公式の試合で女子が（たとえ年下であれ）男子を凌いだことだったと思われる⁹⁵。

直方高女の生徒に野球を教え、野球部の短い歴史を『野球界』で紹介した井土敏慧は、1918年の早大マニラ遠征のメンバーだった。その記事で井土は野球に関する事柄だけでなく、選手の学年、学業成績、年齢、身長、体重、家庭にも触れ、「容貌又実にも美」「温良貞淑、宛として絵の如き美人」「男性化して」「男優り」といった評価を下している。井土は、自宅を訪れた選手たちを「挙措、振舞謙讓温良宛として手弱女の風情こぼるゝ有様」と形容し、「グラウンドに於ける猛者」の女性らしさを特筆している。しかし、井土がいかに選手の女性らしさを強調したとしても、あるいは学校や町の人々がいかに理解し支援したとしても、知事の命令ひとつで解散を余儀なくされた直方高女野球部の事例は、女子スポーツがいかに脆い基盤の上に成立するものであったかをよく示し

⁹⁴ 井土敏慧「直方高女野球部の亡ぶ迄」『野球界』13巻8号、1923年6月1日；寺田瑛『女子の運動競技』109-110頁。

⁹⁵ 石岡学は、「記録の面で男子を凌ぐことに対しては、強い拒否反応が示された」として、その典型に人見絹枝の事例を挙げる（石岡学「一九二〇年代の新聞報道における中学生・女学生スポーツの表象：『東京朝日新聞』の記事を対象として」（小山静子編『男女別学の時代：戦前期中等教育のジェンダー比較』柏書房、2015年所収））。

ている⁹⁶。

1921、22年に和歌山中学は全国中等学校優勝野球大会連覇を果たす。和歌山の野球熱は女学校にも及んだ。1922年11月に粉河高女がインドアベースボールを、翌年1月には和歌山高女がインドアベースボールとキツンボールを始めた。和歌山高女では野球を始めて4、5か月後、「何んだか物足りなく、運動範囲（攻撃、守備、策戦等）があまりに小さく行き詰った状態にあつたので始めて少年野球法によつて研究的に課したところ少しの危険もなく亦無理のないことを確信したので非常な決心と期待とを以て野球部を新設し練習を始めた⁹⁷」。

1923年7月15日、和歌山体育奨励会の主催で第1回和歌山県下女学校野球大会（軟式野球）が開催され、和歌山高女、粉河高女、橋本高女が参加した。和歌山県内務部長松村義一の始球式で試合が開始され、和歌山中学野球部OBの井口新次郎、小笠原道生、矢部和夫らが審判を務めた。矢部と小笠原は第1回全国中等学校優勝野球大会に出場、卒業後に矢部は早大、小笠原は東京帝大に進んだ。矢部は1918年の早大マニラ遠征メンバーの1人でもある。1921、22年の和歌山中学による全国中等学校優勝野球大会連覇の立役者だった井口は、1923年春に早大に進学し、野球部に入部していた。

女学校野球大会を制したのは粉河高女だった。大会の報道には当時のジェンダー観がにじみ出ている。『大阪毎日新聞』は、各チームの運動服をこと細かに描写したあと、「盗塁は女だけに少し鈍いが迂り込みなどは平気なもの安打や二塁打も憂飛ばせばホームラン＼／と歓喜の叫びを挙げるし直球を片手で受ける猛者もあるが時にストライクの数を忘れてたり取れる球をも遠慮したり尻もちついて思はぬしくじりに笑はせる事もあつた」と記している⁹⁸。この記事の執筆者は大阪毎日新聞運動課の竹内であろう。竹内は「女子に奨励すべき体育運動と団体競技」という文章で、女子野球を次のように推奨している。

女子が野球をやると云へはお前は気が狂つてゐるのかと笑ふ者は笑ふ者として、私は真剣正味で女子に野球を奨励したい、今日男子の行ひつゝある運動競技の何

⁹⁶ 中島鋳業野球部は1923年に消滅している。社会人野球部は会社の経営状況に大きく左右された。

⁹⁷ 竹内生「女学生の野球競技」『サンデー毎日』2巻34号、1923年8月5日。

⁹⁸ 『大阪毎日新聞』1923年7月15、16日。

れにしても女子に行はれぬものはない、たゞ性の区別に依つて幾分の手加減、云はゞ運動そのものを適当に女性化して指導を誤らなかつたならば、女子であるからとて野球の行へぬ道理はないのである、従来の日本の女子体育は『女性だから』と云ふ点に固着して余りに臆病であつた、或る教育者は云ふ、女子に野球をやらせると言葉が荒つぽくなると、運動をすれば言葉が荒^ゝぽくなるのは決して不可思議ではない、当然であるが嫁入すればすつかり優しくなつて仕舞ふ、真黒な顔をした女学校時代の運動選手が卒業して見違へるほどの肉体的美人となつたり、其言葉つきも少しも荒々しくなく優しいお嬢さんに還つてゐることは屢々実見した所である、言葉の荒つぽくなると云ふことは枝葉に亘つた杞憂に過ぎない⁹⁹。

竹内はさらに、和歌山の大会が少年野球法を採用したのは良かったが、「服装其他に尚研究すべき点がある」と感じた¹⁰⁰と記している。そして、この試合を契機に大阪では日本女子野球研究会が組織された。女子野球をさらに普及させようとするれば、(軟式)野球の「女性化」とそれにふさわしい服装という問題を解決しなければならなかったのである。

和歌山高女のエース谷田昇子は、のちに「女子野球界のスター」として『サンデー毎日』で紹介される¹⁰⁰。谷田は和歌山市内の吹上小学校出身だが、小学校時代からラケットを用いた少女野球を盛んにやっていた。1923年に和歌山高女がインドアベースボールを始めると、谷田も参加したが、「それもつまらなくなり本式に野球を始め」た。同年5月に野球チームが設立されると、谷田は投手に抜擢された。和歌山中学で野球の試合があれば見に行くし、和歌山中学OBの井口や小笠原からも指導を受けた。谷田の小学校時代といえ、1910年代後半であり、京都の少女野球が和歌山にも普及していたことが改めて確認される。また、少女野球の基礎があったからこそ、和歌山や大阪でインドアベースボールから軟式野球への移行がスムーズになされたこともわかる。さらに、男子中等野球の影響も見逃せない。西原茂樹は甲子園をはじめとする関西の

⁹⁹ 竹内正「女子に奨励すべき体育運動と団体競技(上)」『スポーツマン』2巻10号、1923年10月。

¹⁰⁰ 「女子野球界のスター 谷田昇子さん」『サンデー毎日』3巻10号、1924年3月2日。このほか、1923年度に一塁手、1924年度に捕手を務めた後藤(柳)繁代へのインタビューが竹内通夫「わが国野球史の一側面」と全日本軟式野球連盟編『軟式野球史』101-102頁に収められている。

野球の地域性を指摘したが¹⁰¹、少女野球、女子野球もまさにその1例とみてよいだろう。

1923年12月9日、大阪毎日新聞の主催で第1回女子軟式野球大会が市岡高女校庭で開催される。参加校は和歌山高女、粉河高女、市岡高女、泉南高女、築港北小学校、岸和田市小学校で、女学校や小学校から多数の女生徒が観戦に訪れた（男は関係者以外入場禁止だった）。市岡高女は9月から、泉南高女は最近、軟式野球を始めたばかりであったが、泉南高女の田代投手は小学校時代から野球をやっていたとのことで、「スピードの強い球はちよつと受け手がない」くらいの実力を持っていた。粉河、和歌山、市岡の各高女の校長と日本女子野球研究会員は、女子の競技であることを標榜するために今後は「女子軟式野球」と呼ぶことに意見が一致し、また「練習時には仮令軟球でもマスクを使用すること、そのマスクの女子に適したものを考案すること、衤り込みその他容姿の関係からパンツとスカートを兼ねたものを考案したら」などの意見が出された¹⁰²。

この大会を観戦した竹内正によれば、女子野球をしている小学校は、大阪市内で12～13校、岸和田市内だけでも4～5校で、女学校では市岡、大手前、泉南、女子師範、樟蔭の各高女を挙げている。このうち樟蔭の高等科では朝輝記太留が「自らプレートに立つて兎角引込思案と運動不足になり勝ちな妙齡の処女達に野球技の興味に依つて体育と運動気分を吹き込んで」いた¹⁰³。

文部大臣官房学校衛生課の調査によれば、1924年1月時点で女子師範1校、高女24校で野球（軟式野球であろう）がおこなわれていた。一方、キツンボールとインドアベースボールは「其他」に分類されたが、ここにはホッケー、センターボールなど9種類の運動が含まれていた。「其他」は高女19校で、キツンボールとインドアベー

¹⁰¹ 西原茂樹「東京・大阪両都市の新聞社による野球（スポーツ）イベントの展開過程：1910～1925年を中心に」『立命館産業社会論集』40巻3号、2004年。

¹⁰² 『大阪毎日新聞』1923年12月7-10日；竹内生「女子野球の興味」『サンデー毎日』2巻55号、1923年12月23日。

¹⁰³ 竹内生「女子野球の興味」。朝輝については、白川哲郎「『樟蔭学報』に見る昭和戦前期の樟蔭学園：樟蔭学園草創期資料のデータベース化とその活用（3）」『大阪樟蔭女子大学論集』43、2006年、同「新収集資料に見る大正～昭和初期の樟蔭学園：樟蔭学園草創期資料のデータベース化とその活用（5）」『大阪樟蔭女子大学論集』44、2007年；廣兼志保、木原成一郎「朝輝記太留（1878-1938）の米国体育視察と行進遊戯教材の普及に関する研究」『スポーツ教育学研究』32巻1号、2012年などがあるが、野球への言及はない。

スボール以外の運動がみな1校しかなかったと仮定しても、この両競技をしていた学校は12校にとどまり、軟式野球に大きく水をあけられていたことがわかる¹⁰⁴。

隆盛に向かうかに見えた女子軟式野球だが、1924年を通じて結局1回の大会しか開かれなかった。6月に健母会と中央運動社の主催で開かれた第1回日本女子オリンピック大会がそれである。参加したのは和歌山高女と粉河高女の2校であった¹⁰⁵。この大会で女子野球に対する非難があったことは、「形の上から見て、どうも女子には感心せぬといふ人は、第一に捕手の腰つきがどうだとか、走者のスベリ込があだとか非難げにいふ」との証言からうかがうことができる¹⁰⁶。

第4節 女子野球の「消滅」とその後

1924年10月の『大阪毎日新聞』によると、大阪府学務課は「文部省の調査方針に従つて」府下の公立高等女学校における野球実施状況を調査した（前述の学校衛生課による調査もその一環であろう）。その結果、野球を実施しているのは大手前、市岡、泉南、信愛、樟蔭の5校であった。また、野球を実施していない学校でも、インドアベースボールは可とするものがあつた。学務課主事の皆吉質は個人の意見としてこのように語った。

女子の野球を彼れ此れ云ふものは主として感情的に「よい」とか「悪い」とか云ふので生理上何等悪影響を及ぼすものではない、若しその運動が過激であると云ふ理由の下に之を否認するのであれば、バスケットボールなどは野球以上に激動を要するものであるがバスケットボールについて今日何等の批難を聞かないではないか、私は野球の使用器具を女性的に改良し、武装もスカートなどを用ひずパンツを使用するとか適当な方法を講ずれば何等差支へないものと考えてゐる¹⁰⁷。

『和歌山新報』に「女子の野球は罷り成らぬ！」という記事が掲載されたのは、皆吉主事が女子野球にお墨付きを与えた直後のことであつた。「関西方面では女子の野球が

¹⁰⁴ 文部大臣官房学校衛生課「体育運動団体に関する調査」『学校衛生』6巻6号、1926年6月。

¹⁰⁵ 中央運動社編『日本女子オリンピック年鑑』中央運動社、1924年。和歌山高女で野球を奨励した園部校長はこの直後に退任し、松扉得悟が新校長に就任している。

¹⁰⁶ 島田繁太郎「女子の野球に就いて」（中央運動社編『日本女子オリンピック年鑑』所収）。

¹⁰⁷ 『大阪毎日新聞』1924年10月8日。

追々盛んのやうだがこれ等は女の女らしきところを失ふものでよろしくない、むしろ禁すべきものだと思つてゐる」という文部省普通学務局長関屋龍吉の発言によって女子野球が禁止の憂き目に遭ったことが、次のように報じられている。

女らしさを失ふといふ理由で女学生の野球禁止の通牒を發せられたが本邦でも女学生の野球として組織的にチームを設けたのは本県が嚆矢で和歌山高女をはじめ粉河橋本の各高女には既に立派な野球チームがあり兩三年間、優勝争覇戦行はれ来りその他実科日方はじめ郡部の各高女でも野球チームを設けやうとして練習中であつたのが今回の通牒で全然禁止されねばならなくなつたので弊害如何は兎も角として折角和歌山教育界の一名物となつてゐた女子野球が見られなくなることを遺憾としてゐる向きが多い¹⁰⁸。

この関屋の発言の背後には、明治神宮競技大会をめぐる文部省と内務省の対立があると考えられる¹⁰⁹。明治神宮競技大会（1924年10月30日～11月3日）が終わってまもなく、『読売新聞』は「女学生の運動競技に腿を出させぬ算段、神宮競技を見ても感心できぬと文部省から各学校へ通牒」と題する記事を掲載した。この記事は「昔はラケットをもつてさへお転婆などといはれたものだが近頃の女学生はテニスどころかバットをふり廻して男の学生はだしの猛烈ぶりを示してゐる」と前置きし、女子競技を禁止しはしないが、その弊害を取り締まるべく各女学校に通牒を出す方針だと報じた¹¹⁰。文部省と内務省の主導権争いのなか、男性的と見なされ、また明治神宮競技大会の競技に採択されていなかった女子野球がスケープゴートとなった可能性は否定できない。

ともかく、これらの「通牒」なるものによって和歌山の女子野球は消滅させられ、結果的に第1回日本女子オリンピック大会が最後の試合となったのである。和歌山における女子野球の消滅について、先行研究では1926年に県学務課から野球は女子に不適切、不妊の恐れありとして、突然中止命令が出されたとか、「大正十五年視学官が更

¹⁰⁸『和歌山新報』1924年10月26日。

¹⁰⁹坂上康博『権力装置としてのスポーツ：帝国日本の国家戦略』講談社、1998年；藤田大誠「神宮競技問題」の推移と「明治神宮体育大会」の成立」『國學院大學人間開発学研究』6号、2015年。

¹¹⁰『読売新聞』1924年11月11日。同様の記事は「全国女学生の競技を取締る、運動精神没却の傾向」『大連新聞』1924年11月12日など、他紙にも見られる。人見絹枝は11月13日付『読売新聞』で文部省のこの方針に反論している。

送されるや、女子には野球は過激である、不妊症に陥るなど障害をもたらすから……という理由から禁止令が発せられ、中止のやむなきに至った」とか述べている¹¹¹。しかし、1926年の時点で和歌山に女子野球部はもはや存在していなかったはずである。

事実、すでに1925年春の時点で、関西の女子野球は風前の灯火だった。1925年3月の『野球界』の記事は次のように言う。

関西に於て女子の野球が漸次普及されんとして居た、和歌山県に於ける二三女学校大阪に於て岸和田泉南女学校市岡高等女学校及愛媛県福岡県に於て行はれつゝあり発達せんとしつゝあつた折柄訓令によつて女子野球を禁止されて女子の野球は折角芽を出しつゝある折を摘まれてしまつたのは此上もない残念である。……多大の希望と興味をもつて期待されてこれに日本女子野球協会が大阪で設立されて大毎後援の立場にまでならふとして居た今日に全国訓令の禁止に至つたことは以外であつた¹¹²。

文部省からこのような通牒なり訓令なりが出された形跡はない。実際には、以下の記事から関屋の言葉に教育関係者が過剰反応したというのが真相らしいことがうかがえる。

女子野球は二三年前から関西各地でぼつ／＼行はれつゝあり、去年は和歌山、大阪、愛媛等では大分頭をもち上げて社会の注意を引き完全なる発達を遂げんとして居たが『文部省に関係ある者』が見えて女子に野球が関西では行はれつゝあるが、之は女子としてはどうか……といふ話が一口あつたのが訓令だとか禁止だとかいふ風に世間に伝へられて、今日では女子には禁物の様になつたのは甚だ残念である¹¹³。

¹¹¹ 竹内通夫「わが国野球史の一側面」；全日本軟式野球連盟編『軟式野球史』102頁。いずれも根拠を示しておらず、検証のしようがない。白銀茂夫、白銀安紀子編『なにわのミニスポーツ史』（丸善大阪出版サービスセンター、2003年、135頁）には昭和3年11月20日付大阪朝日新聞に「大阪府立泉南高女や和歌山県立粉河高女を中心に流行しだした女子の野球は一時女子の競技会を風靡した観があつたが近ごろはすっかりすたれてしまった。これはオーバースローボールを度々投げていると乳腺の発達をいちぢるしく阻害し母性をきづつけるということが判つたのと、バットをふりまわすのはいささか非女性的だというのでやめてしまったのだ」という記事が掲載されているが、確認できない。日付に誤りがあるか。

¹¹² 「全国女子運動会総まくり（1）」『野球界』15巻4号、1925年3月1日。

¹¹³ 樫原雄一「女子野球を審判しての所感」『野球界』15巻8号、1925年6月1日。

この文章は1925年4月に開催された第2回日本女子オリンピック大会で、女子野球が実施されたことを受けて記されたものである。主催者は女子野球が「禁物の様」になっていたにもかかわらず、あえて大会の競技種目に採用し、「堅い決意のもと此競技を猶奨励」していた桜井高女の現役と卒業生の2チームが参加した¹¹⁴。桜井高女の校長野村伝四は夏目漱石の門下生で、自由主義教育を推進し、体育運動にも力を入れていた。同校に野球部が設立されたのは1924年、近くの小学生らと練習し、強化合宿もしたという。県内で唯一の女子野球チームだったため、日本女子オリンピック大会が最初の公式戦だった¹¹⁵。しかしながら、翌年の第3回大会では陸上競技、バスケットボール、バレーボール、そして新競技としてホッケーが採用されたが、野球の試合は開かれなかった。陸上競技の野球ボール投げ2位となった沢辺静枝は前年の大会で桜井高女の投手を務めた選手であった。同種目3位に入った河合誠子も桜井高女の選手である¹¹⁶。野球の試合に出られない不満を、沢辺は野球ボール投げで晴らしたのだろう。

こうして、1925年4月の第2回日本女子オリンピック大会は、主要メディアで報じられた最後の女子野球大会となった。先行研究でもそれ以降の大会として挙げられるのは1925年11月まで開かれた東海女学生キツツンボール大会のみである。

女子野球が「消滅」した原因（もしくは背景）はいかなるものだったか。竹内通夫は、和歌山で県学務課が、福岡で県知事が、それぞれ禁止の通達を出したことを挙げ、「新しいものの勃興には、必ず保守派の反動があるが如きで、大正期の女子スポーツ全般に新しい動きとそれに対する反対思潮があったことは否定できない……この禁止通達の社会的背景は、大きな流れとしては、大正から昭和へ向かう時代の保守化と無関係ではないと思われるが、依然として謎のまま残されている」と述べている。しかし、これではなぜバスケットボールやバレーボールは禁止されずに野球は禁止されたのか

¹¹⁴ 樫原雄一「女子野球を審判しての所感」。

¹¹⁵ 60年記念誌編集委員会編『奈良県立桜井高等女学校・奈良県立桜井高等学校60年のあゆみ：将来の展望：1964』奈良県立桜井高等学校、1964年、16頁；奈良県立桜井高等学校創立百周年記念事業実行委員会編『春秋譜1904-2004：奈良県立桜井高等学校創立100周年記念』奈良県立桜井高等学校、2005年、82頁；「大正球女」の優勝旗みつかる』『毎日新聞』奈良版、1984年8月4日。

¹¹⁶ 『大阪毎日新聞』1926年5月17日。

という疑問に答えることはできない¹¹⁷。

庄司節子は、女子野球に対する賛否両論を取り上げたうえで、1925年11月の全国高等女学校校長会議のさい、「体育ニ関スル調査案」に対して、インドアベースボール、バスケットボール、スキーが「女子ニハ過激デハナカラウカト思フ」とされ、種目採択に際しての考慮が促されたこと¹¹⁸、これを受けて1926年5月に発布された改正学校体操教授要目で女子のプレーグランドボールが不適当な種目とされ、「体力並容儀ニ留意シテ教材ヲ配当」とするという方針のもと、野球は「女子が足を開いてバットを振るなど最も女子らしからぬ行為」であるとして女子教材から削除されたとする¹¹⁹。庄司が女子野球固有の状況に言及している点は評価できるが、改正学校体操教授要目の影響力を過大評価している嫌いがある。要目はあくまで体操の授業で扱う内容を定めたものであり、課外活動を拘束するものではない。そもそも校長会議の「体育ニ関スル調査案」では、球技としてローンテニス、バレーボール、バスケットボール、インドアベースボール、ピンポンが挙げられていたが、テニスとピンポンも改正学校体操教授要目で「高等女学校及女子ノ実業学校」の教材には入らなかった。しかし、これをもって文部省が女子のテニスとピンポンを禁止したことにはならないだろう。さらに、削除されたといっても、調査案から削除されただけで、改正前の要目にインドアベースボールが記載されていたわけでもない。女子野球はこれまで要目とは無関係に発展してきたのである。

従来の研究は女子野球の消滅を前提としてその理由を探してきた。しかし、虚心坦懐に資料を眺めれば、違った解釈も可能になる。第一に指摘しなければならないのは、文部省がインドアベースボールと野球を明確に区別していたことである。学校衛生課の「女子の体育運動に関する意見」は、女子に適当なる運動種目として、バスケットボール、インドアベースボール、バレーボールを挙げ、その理由を「走運動多く腕も相当に使用し興味多く女子に缺乏する共同心を養成するに効あるに依り適す」と説明している。一方、野球は、砲丸投、相撲、蹴球、中長距離走などとともに、女子に不適當

¹¹⁷ 竹内通夫「わが国野球史の一側面」。

¹¹⁸ 文部省普通学務局編『全国高等女学校会議要録』文部省普通学務局、1926年、284-286頁。

¹¹⁹ 庄司節子「近代日本における女性スポーツの創造」。田中亮太郎「日本における女子野球に関する研究」、館慎吾「女子野球の歴史的考察と現状に関する課題研究」も庄司説を踏襲する。

なる運動に分類されている¹²⁰。そもそも調査案にインドアベースボールが挙げられていたのは、それが女子にふさわしい競技と判断されたからである。全国高等女学校校長会議の1か月後に文部省で開かれた各府県体操課指導監督者による体育協議会でも、「小学校及女子中等学校生徒に行はしむべき競技種目」にインドアベースボールが含まれていた¹²¹。最終的に要目の教材から外れたとはいえ、インドアベースボールは当落線上にあったのであり、積極的に取り組む必要はないと判断されたということではできても、禁止されたとみなすべきではない。そのことは、1926年8月に刊行された佐々木等、富田彦二郎『女子テームゲームス』がプレーグラウンドボールを取り上げ（市立東京女子体操音楽学校と東京高師附属小学校の生徒がプレーしている写真まで添えられている¹²²）、1928年11月刊行の小野寺永蔵『小学校の球技指導』がインドアベースボールを男女児童用教材に挙げていることから明らかである。小野寺は女子のベースボールについてこう述べている。

ベースボール類は、今日に到るまで、仮令簡単なものでも余り女児童には用ひられなかつた。是について女児童の興味を感じることの不足な原因は多々あるが、その中に一般の女児童は規則に基いて、此のゲームを良くすることが出来ない原因もあると思はれる。然し男の兄弟を持つて居る女児童は、よくその兄弟と混つて此のゲームに興味を感じて相当やつて居るのを見たり、又各地に於て漸次女子テームの組織されて来て居るを見る時は、女子と雖ベースボールをやり得るものであることが充分解る¹²³。

小野寺は文部省の体育研究所嘱託であった。

ただし、（軟式）野球かインドアベースボールかという区別は体育の専門家には明瞭であったものの、教育関係者や社会一般の人びとにとってどうだったかは別の問題である。文部省の女子（軟式）野球に対する低い評価がインドアベースボールに及んだことは十分考えられる。また、バレーボール、バスケットボール、テニスなどが女子

¹²⁰「学校衛生参考資料」『日本学校衛生』13巻10号、1925年10月15日。

¹²¹『東京朝日新聞』1925年12月12日。

¹²²佐々木等、富田彦二郎『女子テームゲームス』山海堂出版部、1926年。

¹²³小野寺永蔵『季節並学年別 小学校の球技指導』文修堂書店、1928年、255-256頁。内容からみて執筆時期は3、4年遡る可能性がある。

のスポーツとして定着し、ますます人気を集めていたことは、女子野球の存続を難しくした大きな原因の1つである。実際には、複数の要因が影響しあった結果、女子野球が衰退したと考えられる。

ただここで改めて強調しておきたいのは、文部省が女子野球（とりわけインドアベースボール）を禁止したのでも、女子野球が消滅したのでもないことである¹²⁴。女子野球が「禁物の様」になっていた1925年春以降においても、いくつかの事例を見出すことができる。1925年10月17日に広島の中山高女で開かれた運動会のプログラムには「インダーベースボール」があった¹²⁵。山梨第二高等女学校（のち山梨高等女学校）校長奥山新治郎は1922年5月に『報知新聞』が実施した「女に過激な運動を奨励してよいか」のアンケートで、「フットボール、跳躍、乗馬、野球等凡て生徒の志望する処をやらせてよいと思ひます……今当校は仮校舎で設備が不十分でありますが来年新築の上は野球をも加へようと考へて居ります」と答えていた。その言葉どおり、野球団はできたようだが、「文部省あたりの干渉風に虐げられて……幾年かをあだに過ご」した、と述べており、女子野球は活動停止に追い込まれたらしい。しかし、1925年に復活し、翌年にも新チームが編成されている¹²⁶。神奈川県立高女では1924年6月21日と1926年11月27日にインドアベースボール大会が開かれている¹²⁷。

1932年に文部省が実施した「中等学校ニ於ケル校友会運動部ニ関スル調査」によると、野球部を設置している女子中等学校は福島県と神奈川県に各1校ある（外地は調査対象外）¹²⁸。後者は横浜第一高女（神奈川県立高女から改称）だろうか。この前後の時期、

¹²⁴ 横井春野は1931年に「女子野球の時代来る」（『野球界』21巻1号、1931年1月）と「女子野球は軟式か硬式か」（『野球界』21巻14号、1931年9月）で女子軟式野球を提唱したが、空振りに終わった。もし彼がインドアベースボールを勧めていたなら、少しは反応があったかもしれない。

¹²⁵ 広島県立甲山高等女学校校友会『会誌』2号、1926年、49頁。

¹²⁶ 『報知新聞』1922年5月20日；鈴木光恵「差出の春に萌え出だ浦若い女子野球団、山梨高女のナイン」『野球界』16巻9号、1926年7月。

¹²⁷ 神奈川県立横浜平沼高等学校創立百周年記念行事校内実行委員会編集部編『創立百周年記念誌：学校百年のあゆみ：学校編』神奈川県立横浜平沼高等学校創立百周年記念行事校内実行委員会、2000年、76-77頁。

¹²⁸ 文部大臣官房体育課編『中等学校ニ於ケル校友会運動部ニ関スル調査』文部大臣官房体育課、1933年。

横浜では女学校卒業生らが「婦人クラブ」を結成し、横浜 YMCA でバレーボールやバスケットボールだけでなく、「室内野球」もしていた¹²⁹。

戦時中の 1941 年に実施された全国男女中等校体育調べでは、東京の恵泉女学園、長崎の鶴鳴高女、大連の神明高女で「インドア・ベース」がおこなわれていたことがわかる¹³⁰。恵泉と鶴鳴はいずれも私立の女学校である。後者は 1920 年代からインドアベースボールがおこなわれていたようで、1924 年卒の生徒が「ソフトボール」を教えてもらったことをのちに回顧しているほか、1925 年秋の運動会で野球をしている写真が残されている¹³¹。

1941 年、長野の上田高女では戦時中特有の事情により野球を始めることになった。

テニスボールが無くなつたので上田高女ではこの頃から野球を始めた皮革製ボールだつて沢山あるワケではないが使ひ古した籠球のボールなど廃品にチヨット手を加へると立派なベース用ボールが出来上る放課後になつて興亜の女学生がバットを打ち振り三々五々校庭に寄り集ると忽ち紅白二チームの間に劇しい競合ひが始まる紫外線を一杯に浴びて“テニスなんかよりはゲームが複雑で面白い”と勇壮活発である¹³²。

詳細は不明ながら、野球のボールはバスケットボールやバレーボールより小さく、皮革をあまり使用しないですむということだろう。そのような事情なので、もちろんグロブなどは使っていない。

1925 年以降、女子野球はもっぱら校内でおこなわれるようになったためか、あまり話題にされることがなくなったのは事実である。しかし、それは女子野球が消滅したことを意味するわけではない。地方紙や校友会誌を調査すれば、より多くの事例が発掘される可能性があるだろう。その一例として次節で満洲を取り上げることにする。

¹²⁹ 服部宏治『日本の都市 YMCA におけるスポーツの普及と展開』167 頁。

¹³⁰ 『東京朝日新聞』1941 年 2 月 12 日。

¹³¹ 創立九十周年記念誌編集委員会編『創立九十周年記念誌』鶴鳴学園、1986 年、322 頁；『卒業記念 大正 15 年 3 月 長崎鶴鳴高等女学校』（長崎県立図書館蔵、ページ番号なし）。長崎 YMCA でインドアベースボールがおこなわれていたことは先述の通りで、鶴鳴高女のインドアベースボールも長崎 YMCA との関係が想定できる。ただ、長崎 YMCA は 1920 年代後半以降活動が停滞し、1930 年に会館を手放している。

¹³² 『信濃毎日新聞』1941 年 5 月 6 日。

第4章 満洲のインドアベースボール

大連の関東庁立高等女学校（以下、神明高女）でインドアベースボールが始まったのは1918年のことである。指導したのは1916年3月に東京高等師範学校体育専修科を卒業し、茨城県立商業学校を経て、1918年4月に神明高女に着任した水野谷初美教諭だった。水野谷にインドアベースボールを教わった岩崎長子によれば、水野谷は同校で最初の若い男の先生で、「随分熱をあげた方」がいたという¹³³。また、1921年の『満日』の記事には神明高女でインドアベースボールが始まったのは1920年春と記されているので¹³⁴、1918年に紹介されたときには長続きしなかったのかもしれない。

水野谷の前後の東京高師卒業生にはインドアベースボールに関わった人物が何人かいる。1921年に奉天高女でインドアベースボールを教えていた四角誠一は、1917年に東京高師本科地歴部を卒業している¹³⁵。1916年に本科地歴部を卒業した川口源司は愛知県立女子師範学校教諭時代にインドアベースボールに取り組み、1918年4月に東京の入新井小学校長に就任すると、新任地でもこれを奨励した¹³⁶。1917年に体育専修科を卒業した船田哲（日本橋高小訓導）は、1919年10月に健康堂からインドアベースボールのルールブックを刊行している¹³⁷。このうち最も早くインドアベースボールに接したのは川口である。川口の影響のもと、同級生の水野谷や1年後輩の四角、船田らがインドアベースボールを奨励したのでだろう。とするなら、満洲のインドアベースボールはYMCAやフィリピンがその淵源だったことになる。

1920年春に再導入されたインドアベースボールは、秋までには「ローンテニスより遙かに興味を以て迎へられ」るようになった。10月に開かれた同校の運動会でインドアベースボールの試合がおこなわれ、女子野球が初めて大連の人々の目に触れた¹³⁸。9期生（1924年卒）の有賀美智子は「当時インドア・ベースボールというのが大流行で、

¹³³ 岩崎長子「格子縞の着物」。

¹³⁴ 『満洲日日新聞』1921年5月15日。

¹³⁵ 「第一回奉天座談会（全体）」福田実『満洲奉天日本人史：動乱の大陸に生きた人々』謙光社、1976年、313頁。

¹³⁶ 『読売新聞』1918年10月6日。

¹³⁷ 船田哲解説『インドアベースボール』健康堂、1919年。

¹³⁸ 『満洲日日新聞』1920年10月7、10日。

お弁当をそそくさと食べて運動場に出て練習をした。私のポジションはキャッチャーだった」¹³⁹。有賀はその後、日本女子大学を経て、東北大学法学科に入学、日本で最初の女性法学士となった。インドアベースボールをしたことは、生徒にとっては誇るべき思い出だった。12期生の三田（上田）順子は「女子校で野球をしていたのよ、私達は」と語って周囲の人を驚かせているし、三田と同期の大槻（千葉）幽香も、水野谷や茂木定株（東京高等師範体操専修科で水野谷の同期）の指導で「日本内地のどの学校もまだだったインドアベースボール」をしたと自慢げに話した¹⁴⁰。インドアベースボールにまつわる回想は15期生（1930年卒）まで見られる。先述したように、神明高女では1940年代までインドアベースボールがおこなわれていたが、1930年代以降はバスケットボール、バレーボール、テニスについて語られることが多くなる。野球は積極的に思い出される対象ではなくなったが、細々と続けられてはいたのだろう¹⁴¹。

神明高女の水野谷教諭は「女子の体育問題」なる文章でインドアベースボールを次のように紹介している。

我校のベースの実際を知らない人は女学校の野球と聞いて直西公園のそれを連想して女子にあられもないと思召す方があるかも知れぬが当校で採用してゐるのはインドア、ベースボールで其の名の示す如く室内で行ふのが本体でベースの間の距離は短くボールも軟かく大きいから勿論グローブとかミットなどは使用する必要は無い、であるから本式の野球に較ぶれば実に幼稚極まるものであるが現在の女学生の体力からすれば先づ適当な処であらう、いくら女子の運動開放論者の我々でも生理的・心理的に相違ある女子に男子と同様な野球を奨励し様とは毛頭思はぬ、けれども現在のインドア、ベースボールだけでは十分と云ふ訳には行かぬ、追々はスポンジボール位を使用して少くとも少年野球位の方法程度にまで進み度いと思ふ¹⁴²。

¹³⁹ 有賀（赤羽）美智子「神明高女時代の思い出」（満洲美会編『合歓の花』所収）。

¹⁴⁰ 三田（上田）順子「楽しかった時代」（満洲美会編『合歓の花』所収）；大槻（千葉）幽香「すばらしい教育」（満洲美会編『合歓の花』所収）。

¹⁴¹ 1930年代の神明高女では全員が放課後のスポーツとして、バレーボール、バスケットボール、テニスのいずれかをしなければならなかった（藤井（橘）綾子「恵まれた時代」（満洲美会編『合歓の花』所収））。

¹⁴² 『満洲日日新聞』1920年12月5日。

水野谷は男子の野球と女子のインドアベースボールを区別し、後者が女子に適したスポーツであることを強調しつつも、将来的にはスポンジボール、すなわち軟式野球に組みたいと述べている。この記事から半年後に「男性化を恐るゝ女学生の野球戯、インドアベースボールは決して憂慮すべき物ではない」と題する記事が見られることから、大連でも女子野球に対する批判が存在したことが知られる。この記事そのものはそうした批判に応えるものだったが、ちょっとしたことからでも世人の誤解と批難を受けることになるので、女学生に対して充分自重し、野球見物に行っても「余り人目にたつ様な批評の言葉」を慎むよう忠告している¹⁴³。次に掲げる「素晴らしい勢ひで男化して行く婦人」と題する記事は、女学生の野球と運動に対する批判の例である。

女学生の運動選手などはとりわけその容姿にも似もつかない様な頑丈な太い手足を持つて居る……いま、で個人衛生の立場にあつた運動にしてもベースボールやテニスなどに変化の傾向を示し頭髪も容貌のきつく見える西洋夫人の髪の間方が流行し服装も軽快なことを喜ぶ様になつて来た……最も大切な婦人の妊娠および分娩機関の成長を妨げて不妊や流産の原因となり遂には産児率の減少を来すことになつてしまう¹⁴⁴。

幸い、満洲ではこのような批判が高まることはなかった。1924年に南満洲中等教育研究会が開催した体育関係者による会議では、関東州の各高女が連合して年1回競技会を開催してはどうかという提案がなされ、インドアベースボールもその種目の1つに挙げられた¹⁴⁵。結局、同年秋に開かれた旅順高女と大連の弥生高女、神明高女による連合競技会では、テニス、バスケットボール、バレーボールが採用されるにとどまり、インドアベースボールは採用されなかった¹⁴⁶。

満洲で野球に取り組んだのは神明高女だけではない。1920年には大連高等小学校の女生徒が「ゴム硬球」の野球を始めた¹⁴⁷。奉天高女で四角誠一の指導でインドアベース

¹⁴³『満洲日日新聞』1921年6月26日。

¹⁴⁴『大連新聞』1924年1月25日。

¹⁴⁵『大連新聞』1924年7月13日。出席者15名のうち、旅順高女の伊藤正美は元旅順中学野球部長、奉天高女の細川儀一はのちに奉天中学野球部長となる人物である。このほか水野谷初美（神明高女）、東京高師体育専修科で水野谷の1年後輩の苗村茂（大連弥生高女）らがいた。

¹⁴⁶『大連新聞』1924年7月30日；『満洲日日新聞』1924年10月18日。

¹⁴⁷『大連新聞』1920年6月8日。

ボールがおこなわれていたことは先述したが、同校の卒業生にまつわる記事を紹介しておこう。

今度新しく奉天署の給仕さん頗る美しいので益能率は上る一方だとは結構なことだ、なんでも女学校に在学中は水泳、テニス、ベースボールのチャンピオンで鳴らした相で、署員から組織されてゐる野球団では同嬢を主将として迎へ片端から撫切りにする計画もあるとか¹⁴⁸。

このほか、安東高女でインドアベースボール、撫順高女で野球（詳細不明）がおこなわれていたことが確認できる¹⁴⁹。また、鉄嶺では1923年から1925年まで、小学児童スポンジ野球リーグ戦に女生徒チームが出場していた¹⁵⁰。1931年に満鉄が全社員に対して実施した運動趣味の調査では、女性社員881名のうち、93名が野球をした経験があると答えている。さらに、先述の1941年の調査でインドアベースボールをおこなっている学校として神明高女が挙がっていたことを考え合わせると、満洲ではある程度の広がりをもって、女子野球（インドアベースボール）が連綿と続けられていたことがわかる¹⁵¹。

ここでようやく、本稿冒頭に掲げた奉天高女と奉天女子師範の試合の背景とその意義について語ることが可能となる。極東において女子野球はYMCAのネットワークを直接あるいは間接的に経由して広まっていった。一方にアメリカとフィリピンから日本内地を経て大連、奉天と伝わった野球があり、一方にアメリカとフィリピンから上海を経て奉天に至った野球があった。奉天高女が野球を始めたのは1921年、奉天女子師範が野球を始めたのは1928年か1929年である。とするなら、両者の試合は、極東各地を別々の経路でめぐってきた野球が、1929年に奉天に到達し、つながった瞬間だっ

¹⁴⁸『大連新聞』1926年5月3日。

¹⁴⁹『満洲日日新聞』1926年10月2日、1927年10月14日。

¹⁵⁰『満洲日日新聞』1924年8月16日、1925年8月21、23、30日。

¹⁵¹戦後、女子プロ野球の立役者となった小泉吾郎は満洲で興行に携わっていた人物である。小泉は満洲時代の人脈をフルに活用して、日本女子野球連盟を設立した。連盟発足時の4チームのうち、ブルーバード監督の中島謙、ホーマー監督の井上訓平はともに大連実業団の元選手である。このほか満俱の岸一郎がホワイト・リネンの監督、大連実業団の安藤忍が京浜ジャイアンツの監督を務めた（桑原稲敏『女たちのプレーボール』）。戦前の教育的な女子野球と戦後の興行的な女子野球は直接結びつくわけではないが、女子野球を考えるうえで満洲が重要な位置を占めることは間違いない。

たということが出来るだろう。ただし、奉天の日本人と中国人がそれぞれ野球をするようになったことが、自動的にこの試合に結びつくわけではない。満洲の日本人と中国人の間でスポーツの交流が盛んになるのは、1928年秋以降のことである¹⁵²。皮肉なこと、国民党への帰順を摸索してした張学良政権と、それを妨害しようとしていた日本側との緊張の高まりが、奉天高女と奉天女子師範の対戦を可能にしたのである¹⁵³。

おわりに——女子野球とジェンダー

ここまで、フィリピン、中国、日本（内地、満洲）における女子野球の普及（と衰退）の過程を見てきた。最後に、女子野球が各地で異なる展開をしたのはなぜかという問題に触れておきたい。この問題を考えるさいに鍵となるのがジェンダーである。

そもそもフィリピンでは、女子野球は政府の教育部門が推進したもので、選手たちは、従来のスペイン＝カトリック的な女性性とは異なる、アメリカ＝プロテスタント的な新しい女性性のロールモデルの役割を担っていた。したがって、フィリピン人男性のなかには、このような一方的な押しつけに対する反感も存在したが、公然と反対することはできなかった¹⁵⁴。フィリピンでは日本と同じく野球が男性性と強く結びついてしたが、女性たちが取り組んだのはもっぱらインドアベースボールであり、野球への「越境」は（少なくとも社会現象としては）見られなかった。

中国では野球そのものが未発達で、男性性との結びつきは弱く、女性が野球をすることに對して大きな抵抗はなかったように思われる。女子野球は、女子バレーボールや女子バスケットボールなどと同じく、中国女性の近代化を象徴するものであった。インドアベースボールによって女性らしさが損なわれるという議論は（少なくとも主要メディアでは）ほとんど見られない。

¹⁵² 拙稿「満洲における日中スポーツ交流（1906-1932）：すれちがう「親善」」『京都大学文学部研究紀要』57号、2018年3月。

¹⁵³ 前年五月に済南事件が起きたさい、奉天女子師範学校は東北大学と並んで排日の策源地と報じられていた（『大連新聞』1928年5月29日）。なお、奉天高女の安藤基平校長は、東京の女子選手を張学良に招待させる計画を進めていた（『大連新聞』1929年6月25日）。

¹⁵⁴ 拙稿「フィリピンカーニバルから極東オリンピックへ」。抵抗は、プロテスタントへの改宗がなかか進まないという形で示された。

日本では、野球と男性性が強く結びついているという点でフィリピンと共通するが、女子野球が上（政府）からの方針ではなく下（学校）からの実践によって広まった点でフィリピンと異なる。このことは、女子野球が不安定な基盤のもとで発展し、男性性と結びつけられる危険性つつねに隣り合わせだったことを意味する¹⁵⁵。この不安定さゆえに、強い自己規制が働き、多くの野球部は禁令を待たずして廃部の道を辿った。

軟式野球という独自の野球が開発されると、実際に女子野球が男子野球へと「越境」することが可能となった。軟式野球は、野球（硬式野球）の少年版（青年男子の間にも広まったが）であり、女性がプレイすることは想定されていなかった。もし少年たちが軟式野球を通じて大人の男へと近づいていくのだとすれば、女性が軟式野球に手を染めればどうなるだろうか。もちろん、「お転婆」とか「嫁に行けない」というのは、女子スポーツ全般に当てはまる批判だった¹⁵⁶。しかし、当時の日本で最も人気があり、かつもっぱら男性性と結びついていた野球の場合、女性の「男性化」に対する懸念はいっそう高まったであろう。だからこそ、インドアベースボールやキツンボールの推進者は、野球との区別に神経質なまでにこだわったのである。それは用語1つとってもわかる。必ず「インドアベースボール」や「キツンボール」であって、「野球」ではなかった¹⁵⁷。滑り込みの禁止もやはり両者の区別を明確化するためのものだったと考えられる。これに対して、女子軟式野球は「野球」を前面に押し出し、滑り込みはその魅力の1つにさえなっていた。そもそも女子スポーツでは、身体接触をできる限り回避することに努力が払われてきた。バスケットボールがその良い例である¹⁵⁸。野球は身体接触の少ないスポーツだが、滑り込みはその数少ない例外である。だからこそ女子のインドアベースボールやキツンボールでは男性性と結びつくことを恐れて滑り込みが禁止されたのである。一方、女子軟式野球では、滑り込みはそれがいかに本格的

¹⁵⁵ 女性にふさわしいとされたバスケットボールやバレーボールにはこの危険性はなかった。逆に男性がバスケットボールやバレーボールをする場合に、女性性と結びつけられる危険性があった。

¹⁵⁶ 本稿でたびたび取り上げた服装の問題も、女子野球のみならず、女子スポーツ全般に共通する問題であった。

¹⁵⁷ YMCAでは「室内野球」という言葉も使われていたが、YMCAのそれは主に男性対象であった。

¹⁵⁸ 野田寿美子、上村絵里衣「スポーツ導入期の日本の女子スポーツに関する史的研究（1）：女子バスケットボールの受容過程に着目して」『埼玉大学紀要 教育学部』59巻1号、2010年。

な野球であるかの指標となった。そればかりではない。軟式野球では実際に女子チームと男子チームの試合さえおこなわれた。和歌山高女は「少年野球のチビッ子選手に」に負けたが¹⁵⁹、直方高女は少年野球大会に優勝した。

女子スポーツは、「女子はスポーツをすべきでない」との批判を「女性にふさわしいスポーツをすべきだ」という言説に置き換えることによって正当化されたが、その根拠となるのは男女の区別であり、そして男の女に対する優位であった¹⁶⁰。直方高女の優勝は、年齢の違いこそあれ、この根拠を揺るがしかねないものだった。もちろん、直方高女は極端な事例であったとしても、女子軟式野球は困難（男との同一化）と女性性（男との差別化）という矛盾する要求に悩まされた。困難への要求は1920年代前半に女子軟式野球が急速に広がる原動力となったが、女子軟式野球は結局女性性への要求を充たすことに失敗し、「消滅」に追いやられた。一方、インドアベースボールは女性性への要求をある程度満たしたがゆえに、女子軟式野球「消滅」後も、細々とではあるが、存続することができたのである。

1925年前後に女子軟式野球が「消滅」したのは、女子軟式野球の人気の高まるのと反比例して、それへの批判が高まった結果であるが、それは日本におけるスポーツとジェンダーをめぐるより大きなプロセス的一幕であったともいえる。1920年代前半はスポーツの大衆化が始まった時期である。スポーツは女性の間にも広まり、なにが女性にふさわしいスポーツかが議論され、選択されていった。同じ時期、スポーツは軍人の間にも広がった。拙著『軍隊とスポーツの近代』で論じたように、デモクラシーの時代に新しい男性性と女性性が摸索されるなかで、日本の陸軍はスポーツを採用した。1920年代前半を通じて陸軍は自らにふさわしいスポーツを探し求めたが、結局、1925年を境に、陸軍からスポーツはほとんど姿を消すことになる¹⁶¹。1925年といえば、普通選挙と学校教練が導入された年である。普通選挙と学校教練は、国民であることが軍人であることという形で、男性性をネイション化し軍事化した¹⁶²。そして、この学

¹⁵⁹ 柳繁代「冬さん！今日は！」（加藤吉史編『大正の球女：加藤冬の思い出』加藤吉史、1996年所収）。

¹⁶⁰ 谷口雅子『スポーツする身体とジェンダー』青弓社、2007年。

¹⁶¹ 拙著『軍隊とスポーツの近代』青弓社、2015年。

¹⁶² 拙稿「軍隊と社会のはざまで」。

校教練の導入を文部省の側で進めたのが、普通学務局長の関屋龍吉だった¹⁶³。女子軟式野球を「消滅」に追い込んだ当の人物である。この事実は、大正末期の男性性再構築のプロセスが、女性性再構築のプロセスとも結びついており、女子軟式野球の「消滅」はそのプロセスの1つの結果だったということを物語っているのではないだろうか。

【附記】本稿はサントリー文化財団人文科学・社会科学に関する学際的グループ研究助成（研究課題名「満洲の体育・スポーツに関する学際的研究：基礎的資料の作成と総合的実証」2016-2017年度）、科学研究費基盤研究（B）（研究課題名「帝国日本と東アジアスポーツ交流圏の形成」2018-2023年度）、三菱財団人文科学助成（研究課題名「満洲国とスポーツ：国際承認と国民統合の戦略」2018年度）の助成を受けておこなった研究成果の一部である。

¹⁶³ 関屋が花嫁学校の設立に積極的だったことは興味深い（『東京朝日新聞』1931年6月18日、1932年4月21日）。